

カムスレイヤー第1
部「アウェイキン・ウ
ルフ・ライゼス・ザ・
オータム・ストーム・
ヨコスカ」

屋敷犬都馬

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

【艦これ×忍殺】 禁断のクロスオーバー！ ナムサン！

マツポーアトモスフェアに満たされた、並行世界的戦後日本。

世界の海を跋扈するシカイ・セイカンとの終わりなき戦いの前線基地、チンジフ。

その一つ、ヨコスカ・チンジフにはぐれカムムス「フブキ」が流れ着くとき、秋の嵐が巻き起こる……。

目次

「アウエイキン・ウルフ・ライゼス・ザ・
オータム・ストーム・ヨコスカ」前編

1

「アウエイキン・ウルフ・ライゼス・ザ・
オータム・ストーム・ヨコスカ」後編

61

「アウエイキン・ウルフ・ライゼス・ザ・オータム・ストーム・ヨコスカ」前編



秋も深まるヨコスカ・チンジフ。

草木も眠るウシミツ・アワーを少女が歩く。立ち並ぶ赤レンガの倉庫を二つ、三つと通り過ぎ、足を止めた。少女が纏うのは、着崩れたセーラー服。季節にそぐわぬ夏服であった。夜風は無遠慮に薄い衣服に染み入る。少女は身震いした。

人類生存を賭した、対シカイ・セイカン戦争。チンジフはそのための前線基地である。チンジフが擁する戦力は少女の形をした兵器、カムムスだ。人類救済というあまりにも重い使命。そこから逃げ出す少女も少なくはない。疲労と空腹を抱え、ウシミツ・アワーを歩く彼女、フブキもその一人だった。

新月の夜。しかしチンジフは暗闇に包まれてはいなかった。強烈な対シカイ・セイカンサーチライトは、休みなく夜空を焦がしていた。低い雲に照り返した光が薄明かりとなり、終わらない日暮れのような青一色の景色を作っていた。

雑に分けた野暮ったい前髪。その奥に、薄闇に浮き立つ真黒い瞳。フブキは、錆びた

鉄扉の上の看板に「米倉庫」のミンチヨ文字を見た。犬の遠吠えじみて腹が鳴る。グーグググググウオオオーン。「食ってやる」フブキは低く呟き、タタミ半分ほどもある巨大な錠前を睨んだ。

フブキは背を丸めた無造作な立ち姿のまま、両の手を目いっぱい広げ、全身にカラテを漲らせる。すると、その目が細まり、センコ花火めいて赤く灯り……おお、如何なる超自然的原理であろうか？ 両腕には2基4門の連装砲が忽然と姿を表した！ それは12・7cm連装砲——ギソウである！

カムムスを兵器たらしめるのは、その身に宿す古代のイクサ船のソウル、カムムスウルである。彼女たちのカラテにカムムスソウルが形を与え、カムムスはギソウと呼ばれる特殊兵装を纏う。ギソウの砲雷撃はその実口径の十倍以上の破壊力を持つ。しかも、カラテによる砲雷撃は、実際弾薬を消費しない！ ノーカラテ・ノーギソウ。カラテこそがカムムスの戦闘力の全てなのである。

フブキの背負うギソウ機関部。その煙管型の吸気管が夜露を吸う。フブキは広げた両腕を横から縦一直線とし、牙めいた構えを作る。薄闇に光る2基4門の12・7cm連装砲。ギソウの名称は実口径ではない、その威力を表している！ 「イヤーツ！」フブキはカラテ・シャウトと共に連装砲を繰り出し、半畳もある巨大錠前に噛みつき敢行！ 「喰らえー」そして発砲！ GY A O O O N E !! 貫通する四本の牙！ 錠前は粉微塵

に砕かれた!

死力を振り絞った一撃であつたのだろうか。発砲直後、フブキは膝から崩れ落ちる。硝煙だけが夜風に流れ、数瞬の静寂が過ぎた——。再び目を開けたフブキの瞳は、深い鳶色であつた。飢えた瞳は、爆風で僅かに開いた扉の隙間に米袋を見つけた。「ギンシヤリ!」フブキは鉄門扉を蹴り開け、米倉庫に突撃せんとする。

その時、視界が斜めに傾いた。「イヤ——ッ!」カラテ・シャウト! まさに背後からのアンブツシユである! 後頭部への致命的トビゲリを受け、フブキの意識は途絶えた——。「曲者め!」着地した柿色の人影は、マフラーめいた布を靡かせながら、侵入者に残心のクナイを突きつける。

「ナイストビゲリ! センダイ!」ハイタッチを求めるナカIIチャンに構わず、センダイは荒縄で曲者を縛る。縛りながらも右手のクナイは無論手放さない。「ギソウを使う米泥棒なんて……。世もマツポーね」ジントウが眉をひそめる。

センダイ・ジントウ・ナカIIチャン。三人は柿色の衣服と似通つたギソウを纏い、姉妹のような印象である。事実、ギソウを纏う彼女等も、またカムムスである。彼女たちは軽巡洋艦センダイ・タイプ。ヨコスカ・チンジフの優秀な夜警である。



目が覚めたら腹筋だつた。「ドーモ。米泥棒の……フブキIIサン。秘書艦ナガトで

す」ハスキーな声で腹筋がアイサツ！ 否、フブキは己が逆さ吊りにされていることに気づいた。ナガトと名乗る女の割れた腹筋は、眼球に触れんばかりの近さに迫っている。その見るからに強固な腹筋は、声の主が並々ならぬカラテの持ち主であることを雄弁に物語っていた。その通り、戦艦ナガトはチンジフの最上位カンムスたる秘書艦なのだ！

「アイエエエ！」フブキは反射的にギソウを装着せんとするも、両腕は荒縄で後手拘束。ナムサン！ フブキは恐る恐る足元を見上げた。ナガトと名乗った女と目が合う。長身。長い黒髪。ギソウはまどつていないが、頭には艦橋めいたヘドギア。フブキは彼女もカンムスなのだど理解した。その向こうに、イボン杉の太枝と己を繋ぐ荒縄が見える。

フブキはスカート姿で逆さ吊りである。その体勢が少女にもたらす悲劇は……当然命の危機以外にない！ 断じてない！

ナガトは、腕組みしたまま害虫を見るような目でフブキを睨み、宣言した。「これより、テイトク権限代行にて、グンポー・ミーティングを開始する」「オネガイシマス！」柿色の三姉妹が最オジギ姿勢を取る。

アンブツシュで意識を絶たれたフブキには知る由もないが、フブキを捕らえたのはこの三姉妹だ。「センダイ。侵入者捕縛の功により、意見を許す」三姉妹長女のセンダイが

叫ぶ。「米泥棒はオキテにより、解体！」夜警筆頭に慈悲はない。

「そうだな。だがまあ、急くな」ナガトが腹筋を歪めて笑う。「ただの解体より、人類のお役に立てる道も……あるではないか？」意味深に問うナガト。三姉妹次女のジンツウが、ツインアホゲ・ライクな前髪を振り乱して叫ぶ！「ダメソレ！ ステカンタブー！ わよ！」取り乱す彼女に、いつもの物静かな気配は微塵もなかった。

「ふああ……」殺気立つ空気を、欠伸が緩めた。舵を模したハイヒールが、露天教練施設、ウン・ドージョーの砂を踏みながらやってくる。彼女は戦艦ムツ。ナガトに負けず劣らずの腹筋所持者だ。「……あら。遅れてごめんなさい。始まつてた？」栗色の短髪には、ナガトと揃いの艦橋ヘドギア。揃いの割れた腹筋。オフザケなアトモスフィアとは裏腹に、彼女のカラテも並大抵ではない！

ムツを見つけて、三姉妹三女のナカニチャンが手を振る。「あ、ムツニサンだ！ この米泥棒、どうする？ やっぱりステカン？」軽巡と戦艦。彼我の格差を省みないシツレイ態度！「そう……ねえ。どうする？ ナガト」ムツは返事を濁し、艶やかな唇を指でなぞる。相手が男なら羨みを禁じ得ない、妖艶な笑みをナガトに向けた。

「ア、アイエエエ？ ステカン、ステカンニニ？ アイエ？」未知の単語に逆さ吊りの重力が加算され、超過血流がフブキのシナプスを締め上げる。赤く霞む視界と思考。「フン……。ステカンも知らんとは。捨てる価値もない。フビン！」ナガトは艦橋ヘドギア

で荒縄を切断する。

——ビダン！ フブキはコラシメ・イポン杉から砂地に垂直落下！ 鼻血を流しながら脳天を強打した痛みへのたうつフブキ。台風翌朝のミミズめいた醜態であった。

「知らぬなら——聞け」「聞いてね」フブキは砂まみれの顔を上げた。ナガトとムツはオフタリ・カラオケめいて手を繋ぎ、奥ゆかしく語りだした。

「私達は」「使命があるの」「シカイ・セイカンを」「駆逐するの」「世界の海から」「一匹残らず」「多大な犠牲を」「払おうとも……ね」ムツはウインクで締めたが、どこかソロロだった。二人の腹筋は見事なシックスパックだった。

「そう……。だから、私は……逃げた」フブキは小さく呟いたが、秋風にかき消された。



賢明な読者諸氏には常識であろうが、カンムスをめぐる歴史的経緯について改めて語る無作法をお許し頂きたい。

コーコク歴2645年。南氷洋に、謎の巨大海洋生物の群れが観測された。クジラめいた外見の彼等は爆発的に増殖し、数年で三百万匹の群れを形成した。その生態調査すら進まぬうちに、「水産資源の枯渇予防」を名目として、A国海軍が駆除を開始した。

当初は哨戒艇の機銃や捕鯨モリで一方的に屠られていた彼等だが、ある日突然、大砲めいた筒状器官を備えた個体が出現した。その器官は実際大砲であった。原理不明の

砲撃により、たちまち哨戒艇部隊は全滅。ナムサン！ そのニュースが世界に流れると、人類は一種の恐慌に襲われた。

国際世論は即時殲滅の大合唱！ 呼応したA国海軍は巡洋艦を展開し、彼等を殲滅！
さらなる大型砲と魚雷を備えた新個体出現、原理不明の砲雷撃により、巡洋艦部隊全滅。ナムサン！

国際世論は即時殲滅の大合唱！ 呼応したA国海軍は空母を展開し、彼等を殲滅！
対空機銃と艦載機めいた飛翔生物を備えた新個体出現。原理不明の航空攻撃により、空母部隊全滅。ナムサン！

国際世論は即時殲滅の大合唱！ しかしおお、ブツダ！ A国海軍が戦力の逐次投入の愚に気づいた時には、全てが終わっていたのだ。人類最強の海軍戦力を誇るA国海軍が壊滅した後、彼等を止める手段などあるわけがなかった。人類最大の脅威となった彼等には、日本の国生み神話に登場する海の怪物——シカイ・セイカンの名が与えられた。ジゴクめいた時代の始まりであった。以降数十年に渡り、人類はジリー・プアー（訳注：徐々に不利）な戦線後退を繰り返しながらも、海の奪還を諦められず戦い続けた。勝算なき消耗戦！ その結果は必定、果てしない国力疲弊である。

漁業と海上輸送を失った人類は、必定としてウエジニ・ハザードに襲われた。実際50億人がアノヨへ旅立ち、生き残ったのは十億足らず。彼等は内陸に点在するシエル

タ・シテイで、飢えと寒さに震えて暮らしている。

時に、コーコク歴2678年。ブツダ・アポカリプスもかくやというこのマツポールの世。血の池ジゴクより恐ろしい海に囲まれた、島国日本。その人口は？——なんと、一億人！ その奇跡を支えるのは無論、カンムスである！

日本は先の大戦に破れ、陸海空の無期限徹底武装解除を施された。マツポすらジユツテとナゲナワで武装する国。それが戦後の日本であった。

ならば、各国海軍がシカイ・セイカンに敗れ去り、石油も食糧も輸入を絶たれる中、武力なき日本はなぜ一億の国民の命を繋いでいられたのか？ それは、大戦中のダイホンエ・ヘドクオーターの発したキアイ・ドクトリン「物資は有限であるが、カラテは無限である」の体現たる、物資を消費せぬ海上戦力のオカゲサマである。

「銃が持てぬならカラテを持ってばいいでしょう」大戦末期のヤバレカバレ・スローガンを体現したカラテ駆動海兵少女存在、すなわちカンムス。戦後数十年の長きに渡り、日本の有事に備えてチンジフはカンムスを発掘し育ててきた。表向きは観光客向けのコスプレ少女集団の体を装いながら。

欺瞞は完璧であった！ 当の日本人ですら、彼女たちを貴重な外貨を稼ぐコスプレ少女集団としか思っていなかったのだから。しかし、今や彼女たちは欺瞞のヴェールを脱いだ。彼女たちカンムスは、実際戦力としてシカイ・セイカンを退けているのだ！

コーコク歴2678年。日本近海のきわめて限定的制海権を有するのみながら、日本国民が最低限度の文化的生活を送れるのは、ひとえにカンムスのオカゲサマである！

◆◆4◆◆

狼藉の未捕縛されたフブキには、もう立つ力すら残っていないかった。意識を朦朧とさせながら、サヨナラ寸前の金魚めいて口を開閉するばかりである。「結局アイサツもできんとは。本当にカンムスか？ 貴様」ナガトはセーラー服の刺繍を見た。「フブキ……。トク・タイプか」トク・タイプは非常にありふれた駆逐艦だ。

「所属を誰何……できる状況ではないか。これではスパイとも泥棒ともつかんな」ナガトは舵めいたハイヒールでフブキの手を踏む。皮が破けて血が滲むが、フブキはもはや叫び声さえあげられない。「可愛い顔して、アンタイ・チンジフなテロリストさんかも……ね？」ムツは膝を抱えるように座り、フブキの手に滲んだ血を指先に絡める。

「ジンツウー」「アツハイ！」ナガトの怒声に不意を突かれた三姉妹次女が、油切れのジョルリ人形めいた敬礼をした。「貴様に任す。指示あるまで生かしておけ。他の連中では殺しかねんのだな」「アツハイ！」ジンツウは、血と砂に塗れたミノムシと化したフブキを肩に抱える。

「では、私は医務室へ。姉さんとナカIIチャンは夜警の引き継ぎを」ジンツウはいつもの可憐なアトモスフィアを取り戻していた。しかし、少女一人を化粧品の入ったズダ・

ポーチのように軽々と肩に掛けて歩くその姿は、カムムスたるなよりの証拠だった。

ジンツウが医務室へ向かった後、ムツが告げた。「あ、この件はご内密にね？ 機密事項よ？」「アツハイ！」「センダイとナカ川チャンは弾かれたように敬礼する。たとえ片目をつぶって悪戯っぽく囁かれようが、上級艦の命令は絶対である。チンジフでは思考は許されない。ただ遂行あるのみだ。

——電解質・乳酸・ブドウ糖。最低限の栄養点滴が静脈へ注がれている。下着姿のフブキは包帯を巻かれ、マグロめいて眠っていた。

ここは未明の医務室。フブキが眠るのは、古机にシーツを張っただけの簡素な寝台だ。砂と血は拭き取られ、生傷には、申し訳程度のガーゼがあてがわれている。ジンツウの手当だ。

ジンツウはフブキの隣に座り、見守って……否、見張っている。実際、フブキの手足に錠前付きの鎖を巻いたのもジンツウであった。「カムムスが泥棒なんて。いったい何があったの……」ジンツウの声は、四方を囲むカーテンに吸われて、消えた。

◆◆5◆◆

ヨコスカ・チンジフに朝が来た。

未明の狼藉は一般のカムムス達には知らされず、チンジフは普段通りに運営されている。朝の訓示に始まり、学科・食事・教練。

夜警の特権で早上がりをしたセンダイ・タイプの三人は、自室でくつろいでいた。三人部屋を基本とするチンジフの部屋割りは、三姉妹には格好である。

「あの米泥棒、もう解体されたかな？」センダイが魚雷クナイを研ぎながら呟く。「マダー。テイトクサンが話を聞くつてー」逆さ天井にぶら下がるナカチャンは、アンドン・ライクなオブジェと化していた。「ザツケンナ！」センダイが柱にクナイを投げる。

「当たらないでください。姉さん」ジントウは名刺でも受け取るように、そのクナイを人差し指と中指でさり気なくキャッチ。ワザマエ！ 柿色の三姉妹は日常生活でもカラテの鍛錬に余念がない。「それより、米泥棒した子が捕まったつて話。機密なのに、なんでもーチンジフ中に広まつてるのかなー？」

ナカチャンの疑問も無理からぬことである。昨晚のウン・ドージョーの一件。秘書艦補佐たるムツが、直々に機密事項と言ったのだ。規律遵守重点のセンダイ・タイプの三人が、無論機密を漏らす訳はない。ならば。

「まさか、ムツサンが——」センダイの言葉を遮るように、ジントウがクナイを向ける！「姉さん。いけない」ジントウの目はクナイよりも鋭く光っている！「そうだよね。疑問を持つだけでもケジメ案件……だよね。あはは」センダイは両手をマイツタ姿勢に開き、乾いた笑いをあげた。

◆◆◆6◆◆◆

ヨコスカ・チンジフ本館5階。火の見櫓めいて西に突き出した一室が提督室だ。秋の夕日に豪華な調度が照らされ、愁嘆場めいたアトモスフィアが漂っている。「ヤツテモータン？ ホンマカイナ？」呪詛めいた響きが静寂を破った。テイトクのカワチ・ダイアローグだ。

カワチ・ダイアローグは、安土桃山時代の僧侶が使った奥ゆかしい言葉だ。だが現代では、タイコモチに使われる面白可笑しい言葉という印象が染み付いている。しかし、ヨコスカ・チンジフにおいてカワチ・ダイアローグを笑うカンムスは、明日の朝日を見ることなく解体される。コワイ！

ヨコスカ・チンジフ2代提督。彼は単にテイトクと呼ばれている。なぜなら、彼が本名も素顔も明かさなからだ。提督室の姿見にテイトクが映る。ガイコツめいた長身瘦躯。フオールン・サムライじみたザンバラ髪は、灰色に枯れ果てている。

ただ一つ、桜の徽章を戴いた海軍帽だけが小奇麗であった。テイトクの纏う白詰襟は、第二種軍装の成れの果て。その袖は、手も足も鉤裂きと油染みでボロ布同然であり、その背中にはマントラめいた無数のミンチヨ文字が刺繍されている。

異様なのは衣装だけではない！ 目深に被った海軍帽の下で、彼の目は旧式のLEDボンボリめいて緑に曳光している。さらに！ 目から下を覆い隠すのは鈍色の鋼鉄メ

ンポだ。幽鬼の一種と見紛うばかりの恐怖満載の佇まい。カワチ・ダイアローグの面白さなどでは到底中和不可能である。

そしておお、ブツダ！ 鋼鉄メンポに刻まれた文字を見よ！ 悪鬼が鉤爪で刻んだかのような禍々しい字体の「提」「督」の二字を！ このブツダデーモンの驚威形相の男が、ヨコスカ・チンジフ司令、テイトクである！

「この錠前をイテモータノ？ えつと……フッキンサン？」鈍色メンポの下から響くカワチ・ダイアローグは、拍子抜けするほど甲高い。この落差で解体されたカムムスは少くない。「アツハイ。やりました」だが、パイプ椅子に座るフッキは、クスリともせず真顔で答えられた。餓死寸前のニューロンが幸いした！ 点滴された糖分で辛うじて意識を保つフッキに、タイコモチを理解する余裕はない。

「コレを。ハーホンマ」テイトクは金属片をボンボリにかざした。「コレな。VH（ヴェリ・ハド）鋼板やノニ。ブチ壊シヤネンで。この可愛らしいお嬢チャンが」テイトクが白手袋の中で弄ぶ金属片は、昨晚フッキが12.7cm連装砲で破壊した錠前の破片だ。

テイトクは、廃城に千年も置かれたような白い玉座に音もなく座り、問うた。「ナガト
ンサン。この錠前イテマエ言われたら、ドヤ？」「無理です」ナガトは生真面目に即答した後、唇を噛んだ。ナガトの誇る強力ギソウ、41cm・ツヨイ・カノンでも、VH鋼

タイプ駆逐艦、フブキです！」フブキは、このチンジフで初めてのアイサツを交わした。

◆◆7◆◆

「食堂はねえ……。アッチ・コッチ・ソノヘン。リョーシヨウ？」ムツからアンニユイに食堂への経路を説明された。しかし飢えたフブキには必要なかった。生存本能のまま、カロリーの臭う方向に走るだけだ。食堂の扉は門と呼ぶほど大きく、白く、分厚かった。「タノモー！」フブキは返事も聞かずに扉を全開、中に転がり込む！

「空母アカギ食事中につき、立入禁止。ヨコスカ・チンジフは如何なる事故発生にも責任を負いません」ご丁寧にも、日・独・英の三ヶ国語で書かれた警告標識は伊達ではない！食事中の空母アカギは、冬眠前の熊が狸めいて見えるほどの獰猛性を発揮して食糧を食る。しばしば、食糧以外にも！

ガツシャバグーン！その食堂は白を基調としていた。床は磨きぬかれた大理石、天井にはシャンデリア提灯、壁にはブツダ十二エンジェルのレリーフ。完璧に調和した大正時代の建築趣向であった。ガツシャバグーン！なお、この怪音はガツシャバグーン！空母アカギがメインディッシュ、「又級のドリア ディアボロス」が「殻ごと喰らう音である！ガツシャバグーン！

食堂への全力疾走により低血糖がヤバイ・レベルに達したフブキ。その目はもう霞んで見えない。その耳には、アカギの発する怪音も、かつて母が歌ってくれた子守唄とし

て聞こえている。

「♪アサリ……シジミ……ハマグリ……♪」

おぼろげに見える長髪の女。母も長髪だった。彼女がオタマで掬うのは汁か。母の作ってくれたミソ・ジルなのか。フブキの意識は混濁していた。

奇遇！ 今フブキが手を付いてヨタヨタと進む、果てしなく長いテーブルの向こう、空母アカギが啜らんとするその汁椀は、貝類山盛りミソ・ジルである！ フブキは濃厚アミノ酸の発する悪魔的匂いに誘われて虎口へと自ら入る。飛んで殺虫LEDに入るバイオカメムシのごとくに！ ナムサン！

フブキが力なく伸ばした手が、誰かに触れた。柔らかく、大きな。包み込むような手であった。

DOGWAAN!! そして発砲！ GYAOONE!! さらに発砲！手と手が触れたら発砲。これは如何なる因果か!?

——冷静な読者諸氏は、まずボクシングを想像して頂きたい。仮に、未熟なインフアイター同士が頭を付けて打ち合っているとしよう。彼等は互いの顔など見ない。相手の足から体の位置の見当をつけたら、あとは闇雲にボデーを殴るだけだ。交錯する拳と拳。その精度は低い、威力は重い！

空母アカギは20cm砲を所持する。飛行甲板にベコベコ・クライシスを引き起こす

ため禁じ手とされる武装だが、食糧を護る為なら発砲に躊躇いなどない。DOGWA AN!! アカギの鮮やかな紅白の袴装束が、磨き上げた空母道防具が、中破ライクに無残に吹き飛ぶ。豊満な胸の突端をアサリが隠す。ゼンネンレイ!

ズズズ、DOGWA AN!! ズズズ、GYA O O O N E!! サツバツ! アカギとフブキは顔を合わせず、砲撃しながらミソ・ジルを啜る! 手持ちの汁椀が空となれば、食卓上の寸胴に満たされたミソ・ジルを直接汁椀で掬って啜る。サツバツたる会食にはアイサツも舌鼓もない。ただ貪食と砲撃あるのみ!

DOGWA AN!! 啜りながら撃つ! GYA O O O N E!! 撃ちながら啜る! 流れ弾に壁のブツダ十二エンジェルが次々と撃ち碎かれる。おお、ブツダは寝ているのですか! カンムス二人の描くこのマツポー絵図を、この惨劇を止めてはくださらないのですか!

ズズズ、DOGWA AN!! ズズズ、GYA O O O N E!! アンビリーバボー! とうとう二人は弾とミソ・ジルが尽きるまで、顔を合わせずに食欲を満たしきった。

「ご馳走様でした」アカギが満面の笑みで顔を上げる。「あらあら?」アカギがムツ・ライクな間投詞を発したのも無理はない。食堂の壁は蜂の巣となり、イオージマの激戦を描いた壁画めいていた。そしてホッペにはご飯粒。

そしてフブキは? フブキは如何に? 彼女は食卓上に身を乗り上げ、マグロめいた

オブジェと化していた。その薄い胸板が僅かに上下する。生存！ ブツダは起きていたのだ！ もし、アカギが二つの汁椀を交互に啜る連装砲スタイルを取らなかつたら、どうか？ アカギとフブキは直撃弾を応酬し、おそらくフブキは轟沈していた。

フブキの手には、その生命を救った汁椀が、しかと握られている！「おいしそう」アカギがフブキの細腕に手を重ねる。ナムアミダブツ！「でも、腹八分目ね」ゴリヤク！フブキの命を繋いだのは、ブツダの加護ではなく、アカギの健康志向であった。「お願いしまーす」アカギは真鍮のベルを鳴らした。

「挺身隊」と書かれた鉢巻装備のヨウセイⅡサン達の群れが食堂へと突入する。掌に乗りそうな彼等だが、マッポー絵図と化した食堂を修繕するために馳せ参じた決死の義勇軍だ。また別の一団が湯気の立つ樽を持ってやってくる。アカギが夕食後に欠かさない抹茶樽を運んできたのだ。

バズソー。ネイルハンマー。ドリル。レンチ。セメント。木杵とワイヤー。アンコロモチ。ブツダの秘蹟めいたヨウセイⅡサンのワザマエにより、アカギが抹茶樽を飲み干す前に食堂の修復は完了していた。中破したアカギの装束さえも元通りに！「お風呂入らなきや」アカギは白く静謐な姿を取り戻した食堂を後にする。

ヨウセイⅡサン達の業務はまだ終わらない。食べ残しや欠けた食器や壁の破片や焦げた葉莖やフブキやらを乱雑にドクロマークの巨大バケツに詰め込むと、食堂裏のゴミ

処理施設へと運び込む。バケツの中身をワシヨイとぶちまけると、ヨウセイⅡサン達は蜘蛛の子を散らすようになっていなくなつた。

ぬめる生ゴミに塗れながら、夢を見ている。眠るフブキは乳飲み子めいて、ミソ・ジルの残滓たるハマグリの蝶番をバリポリと咀嚼している。「オカアサン……」故郷からマイルルへと赴く娘に託されたオマモリは、デイアボロソースに黒く染まつていた。夢に見る母の笑顔はやがて般若めいたトネⅡサンの顔となり、彼女は教導棒を振りかざした。「ナムサンー」夢は終わつた。



飢え渴いた哀れなフブキが、提督室をまろび出てから小一時間後。

ゴングラー。ゴングラー。扶桑型の艦橋を形象したウォールナット製壁掛け時計が奥ゆかしく鳴つた。チンジフの昼が終わり、夜が始まつたのだ。普段は大股にイザカヤ・バー「ホーショー」に直行するテイトクだが、今日は座したままムツの腹筋を視姦中だ。

「あらあら。もしかして、火遊びのお誘い？」下腹部に刺さるテイトクの視線を感じても、ムツはヨウウ・アティテュードを崩さない。「ムツⅡサンや。あのコ、アカギが飯クートルのに行かしタン？」ムツの微笑が僅かに引きつる。「ムツⅡサンもアコギやノー」臍。肋骨。豊満な胸。端正な顎。テイトクは緑眼でムツを舐めまわす。

「あらあら。ウツカリ」ムツは失念を装った。しかし、食事中のアカギが殺人バイオイナゴの大群めいた無差別捕食者であることは、チンジフの常識。最古参のカンムスの一人であるムツが、それを知らぬわけがない！ムツはコケシテイツシユな微笑みを絶やすまいと努め、テイトクの出方を探った。

テイトクは、机上に広げていたお品書きのマキモノを丸めながら言った。「グッドバブルなら事故に見せかけてM I A（訳注・作戦中行方不明）。アカギが綺麗にオソージして証拠隠滅。セヤロ？」「あら。まさか」ムツの掌に重油ライクな汗が滲む。舐めたい。「ホンマ、ムツ∥サンが一番ゴツツイ」「ナガトは所詮ヘタレヤシ」秘書艦の特権、一番風呂の主はクシヤミをした。

「あのコ、フブキ∥チャン見て、ナンゾ思い出サンカ？ムツ∥サン」テイトクの鈍色メソポに夕陽が差す。禍々しい「提」「督」の二文字が赤く浮き彫りとなつた。それを見たムツは、メンポから血が滲み出す幻を見た。「アシガラ……つて言いたいの？テイトク∥サン」

アシガラ。自らその名を言わねば、メンポに滲む提督の血がクナイとなつて飛びかかり、心臓を貫かれるのではないか。因果律が破綻した恐怖。ムツの余裕は失われつつあつた。「セヤ。アシガラ。大概やつたナ」提督はムツから視線を外し、水平線に沈みゆく夕陽を見た。

「そうね」気取られぬよう、ムツは掌の汗を拭う。過剰に健全な太腿を限界まで露出させた、過剰に不健全なブリーツスカートで。アシガラ。彼女は飢えた狼と形容する他あり得ない、無数の兇状持ちのカンムスであった。提督が眺める夕陽にムツも視線を重ねる。「ひどい娘だったわ」自然と、ムツのニューロンに過日の吠え狂うアシガラの姿が思ひ浮んだ。

ムツは呟く。「命令違反。喧嘩。銀蠅。飲酒喫煙に不純異性交遊」そんなアシガラも膝に爆弾を受けて実戦部隊を退き、今では駆逐組の教官を務めている。「アシガラ。殺しても死なへん感じ」「そうだった」「セヤカラ、フブキィチャンもアカギに飯で食わせたぐらいでは死なへんと?」

テイトクのテニヲハ誤用は、無論故意だ! この問いかかけの真意は? テイトクィサンは己に殺意はなかったと擁護しているのか? ムツは訝った。ウン・ドージョーで見たフブキの姿。荒縄で拘束され、コラシメ・イポン杉に逆さに吊るされても、なおギソウを顕現せんとするその反骨。野良犬的気概。それは確かに感じられた。しかし。

「でも……」ムツはキムスメめいて返答に窮している。ハイクにも詠まれるように、秋の日はクレーン落とし。一瞬の沈黙の間に、夕陽は完全に水平線に没した。同時に対シカイ・セイカン探照灯に日が灯る。アーク放電がチンジフの空を焦がし始めた。「でも、ワイがアシガラをツコータ理由は、ナンヤ?」ムツは自らを抱くようにして、僅かな声を

絞りだす「リアルカムムス……」

カムムス。それはゴウコンによりフナダマを宿した娘。ゴウコンとはフルイ語で「合魂」と表記され、処女の肉体にイクサ船の魂であるフナダマを宿す儀式である。娘に宿りしフナダマはカムムスソウルと呼ばれ、その超自然的戦闘力の根源となる。ゴウコンの神秘性はブツダの秘蹟に相当する、しかし！

ムツは己の震えを止めようとしてもしているのか、細い二の腕に爪を立てながら、かすれがちに叫ぶ「リアルカムムス！ ゴウコンに依らず、独力でカムムスソウルに目覚めた。いえ、目覚めてしまった稀有な存在。アシガラはそうだった！」

テイトクは即答しない。日没後の僅かな時間、世界のすべてが青に染まるマジックアワー。提督室も深海めいた色彩を帯びる。「セヤデ」テイトクは赤錆びた金属片を手にとった。再び沈黙が訪れる。

その沈黙に耐え切れず、ムツがまくし立てる「どんなに凶暴でも！ 残忍でも！ リアルカムムスは唯一無二の存在。だから許された。全てを！」「セヤナ」「でも、あのコは、フブキは違うわ！」「セヤロカ」テイトクはVH鋼板の破片を爪弾いた。それは、ムツの鎖骨の中間に当たり、汗を潤滑油として、豊満な胸の谷間に敷かれた蠱惑的レールを滑落していく！「ンアーッ！」ムツの嬌声！

健全なる読者諸氏よ。貴方がもし男性ならば、かの金属片に羨みを禁じ得ないである

う。しかし、それは今論すべき事柄ではない！

「ソレ。証拠ヤロ」テイトクは膝から崩れ落ちるムツに構わず、マキモノを懐にしまい席を立つ。「あのコは……アン……違うわ……」ムツは艶かしい吐息の間に否定の言葉を紡ぐが、テイトクの姿はすでに無かった。しめやかなドアの音だけを残して。

「ハー。今日はノツケからチャワンムシやな」チャワンムシ！ 大股にチンジフの赤ジュータンを踏むテイトクは、ボンとクリスマスの祝祭料理をイザカヤ・バー「ホーシヨール」で注文する腹づもりであった。

◆◆9◆◆

「砂抜き」というケジメがある。

ゴウコンによりカンムスソウルを宿したカンムス達の超人的肺活量は、10分程度の潜水なら苦にもしない。たとえ、キツコー縛りにされゴエモン・バスタブめいた満水巨大タライに沈められようと、簡単には溺死しない。しかしガーボガゴボボ！ それが12分となればガーボボガ！ フブキも限界が近い！ ゴボボ！ そう、今が砂抜きケジメの真つ最中なのだ！

「米泥棒、けっこう粘るっぽい？」ゴンガ！ 鋌付き指貫クラブを装着し、打楽器めいて満水巨大タライを殴打するカンムスがいる。彼女はユウダチ。このチンジフで唯一、カイニ2練度に達したカンムスであり、駆逐艦カーストの頂点に立っている。「12分だよ。

「いっちばーん！　じゃない？」　腰巾着第一位のシラツユが、風呂場の天井に向け中指を突き立てる。イケナイ！　エックスレイテッドサインだ！

13分経過！　瀕死のフブキはつい先刻の出来事を思い出そうとするも、記憶の断絶を埋められない。一つは心温まる会話の記憶。「ひとつお願いを聞いてください」「このチンジフでは、お風呂で歓迎会をするんだよ」はにかみながら語った少女の栗色の髪。リスめいた瞳。

もう一つは悪夢めいた暴虐の記憶。フブキはキッコー縛りにされ、「はい。米泥棒な」と敗北主義的シヨドーされた米袋を被らされ、満水巨大タライにイボン背負いで投げ込まれた。「オポーツ！　エビじみて！」泣き笑いで奇声をあげ、一連の凶行に及んだ少女の栗色の髪。リスめいた瞳。

14分経過！　フブキの記憶の断絶は何故？　酸欠によるニューロン機能低下なのか？　実際酸欠は重点であり、フブキの頭を覆う米袋から漏れ出ていた気泡が……止まった！

「このアサリ、砂も吐かない。失望したよ」腰巾着第二位のシグレの呟きが、カラオケ・ザシキじみて残響する。

そう、ここは風呂場である。そして、「砂抜き」とは、駆逐艦カースト内で行われる、残虐風呂場ケジメ行為の隠語なのである！　ちなみに、現在風呂場に存在するカムムス

全員が着衣である。ゼンネンレイ！

ユウダチ・シラツユ・シグレ。彼女等の属する駆逐艦シラツユ・タイプは、少数ながらヤバイ級の武闘派である。シラツユ・タイプは駆逐艦カーストを力で支配している。サツバツたる駆逐風呂場は彼女等の恐怖支配を確保する手段の一つに過ぎず、市井のセント（訳注：銭湯）のような憩いなどない。

「そろそろヤバイっぽい？ イヤーツ！」ユウダチが鉾付き指貫グラブで裏拳を放つ。半円の残像を引いた一撃がタライを粉碎、ワザマエ！ 溢水が市松パタンのタイルを濡らす。フブキはユウダチの足元に頭を向け、ツキジ・マグロめいて不動。「シグレ、気付けするっばい」ユウダチが振り向くと、すでにシグレの両肩には高压放水ホースが装着済！ コンボ！

「おはよう。いい雨だね」シグレはセイラン・天気予報を告げるヨウセイⅡサンの無抑揚で呟き、高压放水！ 「はい、米泥棒な」と敗北主義的シヨドーされた袋が吹き飛ぶ！ フブキの顔が見えた。その顔面は蒼白。唇は紫に震えている。震えながら小さく開き息を吸う。唇がキツと結ばれた。アライブ！

フブキの無残な姿を見ておののき、ノメーンめいた無表情になっていたユウダチの顔が綻ぶ。「良かったっばい！ 流石に轟沈だと私も立場が——グワーツ！」ユウダチの体が真つ二つに折れる！ 強制オジギ姿勢となったユウダチが見る市松パタンのタイ

は無性に苛立ち、闇雲に裏拳を放つ。「イヤーツポイ！ ツポイ！」事態の急変に対応できず、ヒョロクめいて立ち尽くしていたシラツユが、その猛威の犠牲となる！「きやあつ！ 痛いって——グワーツ！」フレンドリ・ファイアを受けたユウダチは5メートル吹っ飛び、壁画の烈風に激突する。

「チイイッポイ！」ユウダチは舌打ちして目を凝らす！ 白塗りの濃霧の中で、センコ花火めいて赤く曳光するその点は……奴の目であろうか？ ならば格好の標的だ！「ソコツポイ！ ファイア！」PAZOOM!! ユウダチの12.7cm連装砲はBタイプ、一味ウマイ！

発砲音の残響は瞬時にかき消され、霧の風呂場はハカバめいた静寂に支配された。ユウダチはその静寂に恐怖した。

——私は間違いないあの赤い光をスナイプしたっばい。なのに、この手応えのなさは何っばい？ ホラーっばい！

「テイトクが着任しました」背後から、ジゴクめいたハスキーボイスが鼓膜をアンブツシュ！ コワイ！

「オバケっばい！」BARATTATTA!! ユウダチは振り向きざまに機銃を喰らせ、アンタイ・アンブツシュ攻撃！ しかしその手応えはなく——再び、背後からのテリブルボイス！

「忘れ物。サンズリバーの渡し賃だよ」ユウダチの頸動脈に突き立てられた砲弾は、先刻彼女が放ったものだ！ その砲弾からは一切の熱が奪われていた。アリュウシヤンの流水めいた冷気が、首筋からユウダチのニューロンへと忍び寄る。「ぼ……。ぼつぼつぽ、POOOOI!!」ユウダチの耳めいたアホゲが、野良猫に強襲された鳩のごとくに羽ばたく。許容量を遥かに超えた恐怖がニューロンを犯し——ユウダチはしめやかに失禁した。

フレンドリ・ファイアの犠牲となったシラツユ同様、ヒョーロクめいて立ち尽くしていたシグレ。しかし、ユウダチの絶叫がようやく彼女の意識を揺り起こした！ U N I Xめいた高速思考がニューロンを駆ける。——奴の動きは止まっている。攻撃せねば。奴は誰だ。まさか、これが噂の——

水とは明らかに異なる液体が、ユウダチの太腿に恥辱の跡を刻む。サセボからヨコスカにトレードされてから二年近く、駆逐艦カーストの女王であり続けたユウダチ。お、なんと彼女には想像しがたき痴態であることか！ シグレは思わず目を背けた。

その刹那！「イヤーツ！」「グワーツ！」鈍器の一撃にシグレの意識はシャツトダウンされた。フブキは、シグレが視線を外した一瞬の隙に背後を取り、冷徹な砲弾でシグレの延髄を殴打したのだ。釣り上げた殺人ガツオを一撃でカイシヤクする、カツブシ漁船員めいた一撃。これもまた、古代海上カラテの一型、「カツオタタキ」である！

古代海上カラテを二度までも使い、ヨコスカ・チンジフ最強の駆逐艦シラツユ・タイプの二艦を沈めたフブキ。しかし、その目からすでに赤い光は失せていた。糸が切れた三連シヨルリのごとく、フブキ・ユウダチ・シグレの三者は同時に膝から崩れ落ちる。市松マイルをヒノキ桶が転がり、カラコロと音を立てた。

オツヤめいた静寂の中、次第に霧が晴れていく。壁面への激突により気絶していたシラツユが目覚めた。彼女が見たのは再びツキジ・マグロめいて不動なフブキと、ポイト鳴くだけの濡れ犬と化したユウダチ。そして、コブラめいてうねる高圧放水ホースに蹂躪されるシグレだった。

繰り返すが、現在風呂場に存在するカンムス全員が着衣である。ゼンネンレイ！

「お、終わった？」ノビタキのような小声。風呂場の入口、磨りガラスの引き戸が小さく開いた。顔をのぞかせたのは、駆逐艦ムツキである。リスのような瞳をシラツユの手が塞ぐ。「ここにカンムスはいない。いいね？」「アツ、ハイ」

即答であった。ムツキの生存術は従順、その一点のみ。旧型駆逐艦ムツキ・タイプは、ヨコスカ・チンジフ内ではすでに戦力とみなされていない。彼女等は強者にへつらう術を磨き、このザクニクキュシヨク（訳注：弱肉強食）のチンジフで日々を凌いでいる。

◆◆10◆◆

風呂場でのマッポーめいた惨劇から、遡ること二十分。食堂裏のゴミ処理施設には、

ヌタウナギ水煮の空き缶を蹴る少女がいた。ヌタウナギ水煮はこの時代、日本で最もポピュラーな缶詰である。「非番でも、することないからお暇にやしい……。」この、あからさまに媚びた口調の少女は何者か？

賢明な読者諸氏は、訝ってはおられないだろうか？ すなわち、少女がお風呂場で戯れるだけという、先章でのララバイめいた退屈描写により、いささかならぬ眠気を催している読者へ、作者が一種のバリキとして、このキワモノを配したのではないか？ ……と。

アニハカランヤ！ その少女の外見が、あからさまにムツキなのだ！ リスめいた瞳。ハネ気味の短髪は奥ゆかしく栗色を基調としつつも、午後の日差しで僅かに赤味を帯びる。要所を緑に彩られた夏服セーラーはその華奢な肢体を涼やかに彩る。黒タイツはおお、なんと！ テイトク指定の40デニールだ！ 血色の良い太腿を僅かに透過させる、その黄金デニール数たるや、まさにマーベラスルーセント！（訳注：素晴らしき透け）

これはムツキに対する客観的な容姿の記述であり、それ以上でも以下でもない。駆逐艦はチンジフの雑兵である。その駆逐艦カーストで最下層に置かれたムツキ・タイプ。彼女たちの心労をご想像頂きたい。自分を押し殺し、パーシリとしてバシャホー スじみた毎日を送るムツキが、時折垣間見せるアナザーソウル。それが睦月なのだ。

「みんな……。もつと睦月を、大事にするがよいぞ！」ムツキはヌタウナギ水煮の空き缶を蹴り飛ばす。缶は何かに当たりムツキの額に反射直撃。イタイ！

「ふええ……。涙目でキムスメ座りするムツキ。「壁に当たったかな？」無慈悲なことに壁ではなかった！「およ？」塵芥から突き出した煙管型の吸気管に、僅かな傷。トクワ
ン・タイプ 駆逐艦だ！

ムツキは苛立ち紛れに缶を蹴り飛ばし、名も知らぬカンムスを傷つけてしまった。これは暴力沙汰でありケジメ案件である！

「「「「ゴメンナサイ！」」」」

ムツキは決断的に最オジギ姿勢を取り、五連発ゴメンナサイを繰り出す！ これぞムツキ必殺のシヨセイ・ジツだ！ ワザマエ！

空き缶が当たったのはギソウの吸気管だが、ギソウはカンムスにとっては手足の延長。当然に痛覚を覚える！

「ナムサン！」フブキはブデイストの間投詞と共に飛び起きた。夢心地ニューロンは今やニルヴァーナの彼方。鋭い痛みと最オジギ姿勢でゴメンナサイを連射する眼前の少女だけが現実であった。

「アエエ……。？」UNIXはおろか、ペケロッパ級の演算すらおぼつかないフブキのニューロンでは、この状況を理解するのは不可能に近い。ヒョーロクめいた顔で立ち尽

くすのが精一杯である。息切れして顔を上げたムツキと、フブキの目が合う。

「あれ？ あなたは米泥棒。な、なんでもありませんごめんなさい！」

【ゴメンナサイ！】

読者諸氏には、ムツキのゴメンナサイ速度が低下したと思われるだろうか？ 否！

ムツキのゴメンナサイ速度はすでに秒間24発となり、ホーミー共鳴を起こしたゴメンナサイが唸りをあげているのだ！ タツジン！

「い、いいよ？ 謝らなくて」フブキは、痛みの原因と眼前のゴメンナサイ速射砲との関連性に、ようやく気づいた。「本当ですか？」「本当です」「責任の所在をウヤムヤしていただけますか？」「ヨシナにウヤムヤします」「それはヨロシク重点です」互いにオジギ姿勢でサラリマンめいた美辞麗句を交換し、再びフブキとムツキの目が合った。

「ドーモ、フブキさん。ムツキです」「ドーモ、ムツキさん。フブキですアバーツ！」「ケジメ級インシデント発生！ UNIXコマンド並の厳格さを要するアイサツ儀式において「チャン」を誤用するとは！ ムラハチにされても文句は言えない！」

ムラハチとは「駆逐艦叢雲《むらくも》に8時間罵られるほどの精神的苦痛」を表す概念的用語であり、その実体は最悪な集団リンチである！ 「アバーツ！ 私チャン言つたと聞きましたか？」ムツキはオカメ・ライクに目を細めて言う。「聞かないので、ひとつお願いを聞いてください」

「ヨロコンデー！」フブキは最オジギ姿勢で目を閉じ、ムツキの宣告を待つ。すでにギソウの靴裏や煙突の煤なら舐める覚悟は完了していた。「えつと、一緒にお風呂に来てくれるかな？」「アツ……ハイ？」「あと、アイサツも終わったし、私のことはチャンでいいよ。フブキチャン」フブキは思った。このマッポー絵図じみたチンジフに、天使が舞い降りたかと！

堅苦しいオセジ・プロトコールの時間は終わった。フブキとムツキは、ようやく少女に似つかわしい笑顔を取り戻した。しかしムツキの笑顔が僅かに曇る。「言いくいけど、汚れてるね。フブキチャン」「ゴメンナサイ。泥棒だから……」「人格じゃなくて。服とか」「アツハイ」

見れば、フブキは残飯とヌタウナギの粘液に塗れ腐臭を発していた。その醜態は、控えめに言つて死後三日経ったドブネズミであつた。今すぐ風呂に入らねば手足が腐るだろう。今すぐに！

「フブキチャン。このチンジフでは、お風呂で歓迎会をするんだよ」ムツキはフブキの手を取り、風呂場へと曳航中である。フブキは知らない。欺瞞的駆逐浴場は、血も凍るムゴイ級処刑場であることを！「フツ・フツ・フツ・フツ・フツ・フツ・フツ・フツ」ムツキの口笛は耳慣れぬメロディで、やけにスタツカートが効いていた。

「それ、ヨコスカで流行つてるの？」フブキは聞いた。「そうだよ」欺瞞！ムツキはフ

ブキと視線を合わせぬよう、口笛に合わせて頭を左右にドリーした。リスめいた瞳が潤んでいた。欺瞞的口笛はヨコスカ・ローカルのモールルス信号。ムツキが繰り返す「サバ・サバ・サバ」は、「敵艦鹵獲セリ」を表す暗号である。敵艦とは無論、フブキ！

折しも、特権の一番風呂を堪能せんと脱衣所に來ていたユウダチは、犬耳ライク・アホゲにて欺瞞的口笛を聴取した。「さあ、素敵なパーティーしましょう！」ユウダチはギソウを装着し、秘密周波数で無電を送る。シラツユ・タイプの僚艦を、無慈悲なケジメの顧客として召喚するために。

哀れなフブキが脱衣所に着くと、すでにシラツユ・タイプの三艦がギソウを纏って待っていた。「アエエッ！ シラツユ・タイプ！ 三人も！ ヤッターカコイイ！」フブキからこぼれた感嘆の声。その、なんと純粹であったことか！

マイズル・チンジフにて不遇をかこつ日々、フブキは毎夜カムス凶艦を眺めて心を癒していた。「実戦派駆逐艦、シラツユ・タイプ」穴のあくほど見つめたカムス凶艦。その写真通りの三人が、いま目の前にいる！ フブキには、彼女たちがブツダエンジェルのごとくに輝いて見えた。アイロニー！ 彼女等はブツダデーモンより冷酷な処刑者だというのに！

「フン。この米泥棒はアイサツもできないっぽい？」ユウダチが顎をしゃくる。蝶リポンを正面に飾った長い金髪が、ササラめいて流れた。「アバーッ！ シツレイでした。

ドーモ——グワーツ！」アンブツシユ！ アイサツは中断された！

ユウダチの顎動作は、フブキの背後で身構えるムツキへの合図だったのだ！ 「カンニーン！」ムツキは奇声を上げながら、フブキの頭に袋を被せる。米袋には敗北主義的シヨドーで、「はい、米泥棒な」と記されている。かくして、凄惨なケジメが開始された！

「見えない、見えませんアバーツ！」視界を奪われ、混乱するフブキ。「カンニーン！」ムツキは、その背後から渾身タツクル！ 「痛いよアバーツ！」顔面を強打しのたうつフブキ。「カンニーン！」ムツキはフブキをさらに縛めるため、荒縄でキツコー縛りにしているく！

「さすが、ムツキは手馴れてるっほい」ゴウランガ！ シラツユ・タイプ三艦がヨコスカ・チンジフにトレードされて以来、この血も凍るケジメ行為は、新入り駆逐カラムスへの恒例行事なのだ！ そしてムツキも、この非道なケジメ行為に毎度加担させられているのだ！

「今回は米泥棒に相応しく、米袋のオプシヨン付きだ。失望させないでくれよ」シグレが冷めた目で見下ろしている。「何分持つかな？ いちちばーんを狙ってね！」シラツユがストツプウオッチのネジを念入りに巻いている。シラツユ・タイプはこの残虐ケジメ行為により新入り駆逐カラムスに恐怖を植え付け、支配構造の礎としているのだ。コワ

イ！

ムツキは泣いている。顔で笑ってソウルで泣いている。なぜ米袋をかぶせねばならないのか。なぜキツコー縛りにせねばならないのか。久しぶりに何の気取りもなく、チャンで呼び合つたばかりのその相手を。当然だ。シラツユ・タイプに逆らつた駆逐艦は、ヨコスカの朝日を拝めないのだから。

「オポーツ！ エビじみて！」ムツキは涙を奇声に変え、ひたすらに強く縛る。「カンニーン！」そして、渾身のイポン背負い！ フブキを満水巨大タライに轟沈せしめた！
ワザマエ！

——その後のマツポー的惨劇の顛末は、読者諸氏がすでに御覧の通りである。フブキは、何かに憑かれたような凶行に及び、シラツユ・タイプを粉砕した。ユウダチとシグレはシラツユが自室へ運び、フブキはムツキが医務室へと運んだ。当然、二人とも事の次第を誰にも語らなかつた。

◆◆◆

惨劇から一夜明けた。スズメの戯れる声がして、フブキは目覚めた。また医務室の簡素な寝台だった。朝の光が眩しくて、フブキはウェイアンコー（訳注：抜錨）めいた寝返りを打つ。すると、枕元に巨大なスズメがいた。否、ムツキが突つ伏して寝ていたのであつた。

栗色の髪の下敷きになった、ささくれたか細い指。その先に紙片。包装紙の裏に書かれた丸文字が見える。字は震え、最後の一文字は滲んで読めない。「ごめんなさ——」その下には銀紙の包みがあった。

「いいよ」フブキは銀紙を剥いて、ヌタウナギ・ガムを手取る。一口噛むとあふれる粘液。そして潮臭い苦味。「おいしいよ。ムツキ嬢ちゃん」それでもフブキは、ムツキが起きるまでガムを噛み続けた。粘液あふれる潮臭いヌタウナギガムを。

ヌタウナギは、円口目ヌルイ科に属するウナギめいた生物である。まだ漁業が成立していた時代には、彼等は深海に沈んだ生物を肅々と腐食する分解者に過ぎなかった。彼等は時折漁網に紛れ込んで大量の粘液を発し、その重量で網を破壊しては漁師に疎まれる。その程度の卑小な存在に過ぎなかった。

しかし。このマッポーの世において、よもやヌタウナギが主要な食料になろうとは、ブツダの智慧をもってしても想像できなかったのではあるまいか？ この経緯も説明せねばなるまい。ヌタウナギがシカイ・セイカンの残骸を喰らうことが発見されたのは、約二十年前のことである。

その数年後。日本政府直属の極秘研究機関「オクライリ」は、禁断の研究報告を上梓した。それは、シカイ・セイカン・ヌタウナギ・人間の三者を、食物連鎖で繋ぐという驚愕の内容であった！ 毎年百万人弱の餓死者を出していた日本政府は、なんとこれを

許可した！

かくして、一億の日本国民はヌタウナギを食しはじめた。ヌタウナギはシカイ・セイカンの死骸さえあれば容易に養殖可能であった。また、シカイ・セイカンを食べたヌタウナギには必須アミノ酸の全てが含まれていた。つまり、食味以外の全ての面で理想的なタンパク源であったのだ。そう、粘液と潮臭みあふれる食味以外は！

◆◆12◆◆

朝のウン・ドージョー。鉄骨組の朝礼台に、秘書艦ナガトが仁王立ちしている。訓示の時間だ。ナガトの隣でコケシめいて直立するのはフブキである。よく見れば、フブキの膝は細かく震えている。コケシと振動。よもや、タノシイコケシを連想したヨコシマな読者諸氏などはおられぬであろうか？ おられるならば、自らを決断的にケジメしていただきたい。

見慣れぬ顔にザワめくカンムス共。秘書艦ナガトは舵めいたハイヒールで鉄板を一踏みした。パンジャン！ ドラじみた轟音が、ウン・ドージョーに静寂をもたらす。「紹介する。マイツルからの特別研修生、フブキだ。今日から駆逐組に入る。歓迎してやれ」

《——マイツルとアレしてもナニヤし。転属はアカン。名目はヨシナで頼ムデ——》ナガトは、テイトクの曖昧模範な指示を思い返して歯噛みする。マイツルに記録を照会す

ると、確かにフブキなるカンムスが所属していた。しかし、訓練記録も出撃記録も一切非公開だと言うのだ。まともな理由など付けられるわけもない、ならば――。

ナガトはフブキに紙片を渡した。ナガトの黒い目は無言で命じている。一言一句間違えずに読めと。「アツハイ」フブキは小声で答え、朝礼台の中央に進み出る。そして、千秋楽でオスモウ・チャンプにヒョーショージョーを読み上げる某国大使めいた甲高い声を張り上げた。

「ドーモ、皆さん。フブキです。私はマイツル・チンジフ所属でした。だが、病気のため、カンムスとしての教練は、座学のみ、履修してきました。この度、快癒に伴い、実習開始の運びとなりましたが、マイヅルは、これをサイオーホースとすべく、最も駆逐の運用が充実した、ヨコスカで学べと命じました。ヨシナに、オネガイシマス！」

読み終わったフブキは最オジギした。ウン・ドージョーは一瞬の沈黙に包まれた。フブキは恐る恐る頭を起こし、壇上から居並ぶ数十のカンムスを見た。彼女たちは互いに顔を見合わせるばかりだ。

……これは無反応？ 拒絶？ シカト花札？

やがて、まばらに拍手が起こった。その数秒後、ウン・ドージョーは拍手と歓声に包まれた。CLAPP!! 「カチコチカワイイ！」CLAPP!! 「マツカカワイイ！」CLAPP!! 「イナカカワイイ？」CLAPP!! 「ヨロシクカワイイ！」おおむね、好

評である！

秘書艦ナガトは、舵めいたハイヒールで鉄板を一踏み。パンジャン！ ドラめいた轟音で、再び静寂が訪れる。「朝の訓示は以上。各自配置に就け」BROOOOW!! ムツが法螺貝を吹き、訓示は終わった。ムツは、この法螺貝を吹くためだけに、朝礼台の横で直立していた。

◆◆13◆◆

一限が終わりに近づいている。木造校舎の一室に教科書を朗読する声が響く。朗読しているのはフブキだ。隣の席のムツキから借りた教科書、『対深海闘争史・序』を、背筋を正して読んでいる。「真面目っぽい」最後列の窓際でユウダチが呟く。その右にシラツユ。その右にシグレ。一帯は、シラツユ・タイプの専有する教室一等地であった。『……かくして、ヌタウナギ水煮が大量生産されることにより、日本人は慢性的タンパク不足から救済されたのです。ヌタウナギ水煮の製造工場、およびヌタウナギの養殖法は国民には極秘です。しかし、これは国民の安定食料供給のため、やむを得ぬことなのです。』

フブキは、模範的速度で立て板に水の朗読を終えた。教官が言う。「よろしい。そこまで」フブキは着席を許可されたのか判別できず、立ったまま隣のムツキを見た。教官はフブキに構わず問う。「では、極秘とされるヌタウナギ水煮の製造工場。それはどこ

にある？——そこ、キサラギイ！」 S N A A A P!! 教官はノーモーションで
チヨークを射出!

紫紺のジャケツト。黒のスカート。やや性的な曲線をタイトな衣装に包み、肘から先には白手袋。ウエーブの効いた長髪には、アンテナを横つたヘドギア。一見柔らかな女教師じみた外見だが、それを決定的に否定するのは、狼めいた鋭い眼光! そう。彼女こそが、駆逐組教官にして伝説的リアルカムス、マスタⅡアシガラである!

アシガラがチヨークを放つとき、命の炎が一つ消える。彼女が晩酌の肴とする自作焼き鳥は、スズメやカラスやハトポツポをチヨークで射止めて調理したものだ。スラッグ弾めいた殺人チヨークが迫る。スヤスヤと眠るキサラギの頭に、ピンクの羽めいたアクセサリごと頭蓋骨を射抜かんと迫る! アブナイ!

ムツキに促され、着座したばかりのフブキの右コメカミをかする軌道を描き、第一殺人速度に加速されたチヨークはキサラギを襲う! そしてキサラギは——微動だにせず! 哀れ、アノヨへのヘンロの旅に? 「ヌタウナギはもうイヤです……」寝言! キサラギは生存している! では、殺人チヨークは何処に?

「マスタⅡアシガラ。この、チヨーク、あの、どう……すれば?」フブキは右手を曖昧に上げる。人差し指と中指の間、確かに存在する一本の白き棒! それは、間違いなくマスタⅡアシガラが放った、必殺のチヨークであった。(止めた?) (マスタⅡアシガラ

のチヨークを（ありえない）私語が死後となるアシガラの授業では非常に稀なことではあるが、さすがに駆逐達もドヨメキを禁じ得ない！

アシガラとフブキは無言のまま、しばし見つめ合う。アシガラの鋭い目が見開かれ、やがて僅かに潤んだ。しかし、この時のフブキにはその意味を知る由もなかった。

「チヨークはやる。代わりに答える。フブキ。どこだ？」「ハラショー島です」「……アタリだ」アシガラは教本を畳んだ。「今日はここまでだ。キサラギは起こしておけ」アシガラが言い終えるや否や、級長のムツキが号令を発した。

「キリーツ！」号令にキサラギが飛び起きる！ 「レイ！」 「「アリガトゴザマシタ

！」「」 駆逐組全員の、一糸乱れぬ最オジギ！ アシガラはやや右足を引きずりつつも、悠然と教室を去る。その間、駆逐達は最オジギ姿勢を堅持していた。「あいつ、化け物っぽい……」ユウダチは最オジギ姿勢のまま、フブキが手に持つチヨークを見ていた。

「やるって言われても、チヨークなんて——アバーツ！」D I I I I N G D O O O N G
!! 授業終了を告げる鐘の音が時限信管を作動させたかのごとく、チヨークが榴弾めいて爆裂した！ 「アバーツ！ 制服汚れちゃうよアバーツ！」フブキの一張羅、緑と紺が不揃いに配された、いかにも田舎臭いセーラー服が粉塗れになる！

「フブキちゃん！ 擦ったらダメ！」……あら。もしかして、助けていただいたのかしら？ お返しをしませんと」ムツキとキサラギは、チヨーク粉を落とそうと躍起とな

るも、その甲斐なくフブキは無慈悲な白い粉末に汚染されていく。決して白い液体にではない。ゼンネンレイ！

「イヤーツ！」ついに、フブキは自らにフートン叩きめいた掌打を見舞い始めた！「イヤーツアバーツ！」「目が、目が痛いよアバーツ！」必定、自爆である！

その喜劇的光景を遠巻きに見ていたのは、シラツユ・タイプの三人であつた。「頭はアレっぽいけど、カラテはヤバイ級だよ、あの子。関わらないのがいいちばーん……かな？」珍しく小声でシラツユが言う。「フツ。雨は、いつか止むさ。好機を待とうか」シグレも同調する。

「なに？ 二人ともビビってるっぽい？ 敗北主義っぽい！」ユウダチは年齢相応の胸を張り、鉾付き指貫グラブを装着する。授業中は優等生を演じるために外しているのだ。何たる欺瞞的態度！

「私、昨日はちよつと油断しただけっぽい！ 今日こそソロモンの悪夢を見せてあげるっぽい！」

威勢を張りながらも、ユウダチの目が泳いでいたのを見逃す二人ではなかつた。「ヨリ！」「ドリ！」「ミドリ！」窓に向け奇声を発しつつ、ジャブを繰り出すユウダチ。その後ろで、シラツユとシグレは目を合わせて頷いた。「ポイ！ ポイ！」ユウダチはワンツーポイポイのシャドーを反復していた。

◆◆14◆◆

ヨコスカ・チンジフ南南東、百四十五海里。

艦隊が浅海に差し掛かると、水平線に掲揚塔めいた三本煙突が見えてきた。ハラシヨール島ヌタウナギ加工場である。

テンリユウが叫ぶ。「全艦微速！ 缶は焼けてないな？」「やつと着いたっばい？」ユウダチは鉄付き指貫グラブで額をぬぐった。疲弊しきったその姿。普段のジョックス的増上慢は見る影もなく、犬耳ライク・アホゲもヘタレている。テンリユウ以下五艦は、ようやく死地を脱した。

——遡ること、十六時間。

教練終了から夕食までの、短い自由時間のことだった。チンジフ各所に配されているチャボウズ社のスピーカーから、ナガト秘書艦の声が響いた「司令部から連絡。以下のカムムスは、ウン・ドージョーのイポン杉前に整列せよ。テンリユウ。タツタ。ムツキ。キサラギ。フブキ……」そこまで聞いて、ユウダチは嗤った！

自室で隠匿センベイを齧るユウダチ。そのニューロンは、名の上がったカムムス達の戦歴を、UNIXめいた高速検索で参照し検討、弾き出される結論！「ハッ！ あのクス共、とうとうステカンにされるっばい！」ナガトは僅かに苛立った声で続けた。「……そして、ユウダチ」

「アエエエ？ ユウダチ、ユウダチナナンデ？ アエエ？」教導棒でコメカミを殴られたかのような衝撃に襲われながらも、ユウダチは走る！ 「三分で整列完了せよ。繰り返し返す……」遅刻はケジメ案件。時間厳守重点なのだ！

ユウダチが駆けつけると、ウン・ドージョーにはオオヨドの姿があつた。彼女は軽巡洋艦ながらも参謀という要職を務め、さながら頭脳戦艦とも呼ぶべきチンジフの枢軸艦である。オオヨドが教練や作戦行動などをするのではなく、普段は作戦室か電探室でモヤシガールを決め込んでいる。その彼女が、午後の日差しに眼鏡を晒している。不吉だ！

「私がステカンにされる理由なんて……」ユウダチは、自らの行状をUNIXめいた高速検索で参照し検討、弾き出される結論！ 「いっぱいありすぎるっぽいー」もし、ユウダチが隠匿センベイで乾いた喉をオチャで潤していれば、過剰水分による失禁は免れなかつたところである。

「お早いですねユウダチさん。トンボのようです。秋の気配を感じますよ」オオヨドの淀みないサラリマン・オセジ！ 戦闘艦ではない彼女だが、オセジ一つにも漲るカラテには、流石に枢軸艦の風格が漂っていた。アンダーリムの眼鏡が鈍く輝き、ユウダチには死神のカマめいて見えた。

ユウダチは飼い主に粗相を詫びるシバ・ドッグめいて、わめく！ 「今までのことは湯

で洗います！ 眼球の着色を変えて頑張ります！ ステカンをやめて懇願します！」何たる無教養オセジであることか！ 焦燥に駆られるユウダチに、オオヨド並のサラリマン・オセジは不可能であった。

オオヨドは、眼鏡をかけ直してから言った。「ユウダチさん？ ハイキンテキを保ってください。今日お願いするのは、ただの輸送任務です。ステカンなんて使いませんよ？」「……アエエっぽい？」ユウダチはヒョーロクめいて立ち尽くす。乱れた息が整う間に、前二艦、後ろ三艦の複縦陣がやってきた。

陽気に手を振りながら、眼帯のカンムスがやって来た。「おうオオヨド。どうせまた輸送任務だろ？」三步遅れて、泣きぼくろのカンムスがやって来た。「死にたい船はどこかしら？」古参テンリュウ・タイプの子艦である！ 彼女等の放つテンキョー（訳注：比類なき知性）・アトモスファイアはあまりに独特であった。

テンリュウ・タイプは、度重なる遠征任務で頭のネジを海に落としてきたのではないか？ ……と、ユウダチは常に訝しんでいる。しかし、それを口にする愚は犯さない。無論オクビにも出さない！ ユウダチは第一オジギ姿勢を堅持し、次なる行動を思索する。

実際、テンリュウ・タイプは軽巡洋艦の末席に過ぎない。しかし、艦種が決定的な身分の差となるチンジフにおいて、上級艦種にシツレイ行為をはたらけば、すなわちケジ

メが待っている。それを知らぬユウダチではない！「ドーモ。テンリユウサン。ならばにタツタサン。ユウダチです」第二オジギ姿勢からの、高難易度ダブルアイサツが見事に決まった。ワザマエ！

しかし、二人はユウダチのダブルアイサツを一顧だにせず！「オオヨドサン。オレを前線に出せてテイトクに言つとけよな」「戦闘任務なら、私のほうがテンリユウサンより上手でしょう？」ユウダチは負け犬めいて唇を噛む。アイサツを完全無視されることは、ドゲザ級の屈辱だ！

（オジギを返せ、このテンキョー共！）ユウダチは、心中にダブルエックスレイテッド単語を去来させながら耐え忍ぶ！ ニンニク！

怒りと屈辱に震えるユウダチが目にしたのは、さらなる不可思議光景だった！ あの米泥棒フブキが、ムツキ・タイプの二人に左右から腕を抱かれながら微速前進中なのだ！

「すごいよフブキサン」「アエエ……」「まったく、すごいわよ」美少女二人に両脇から褒めちぎられる、冴えない田舎者という不可思議配置！ 何たる軽小説ハレム主人公的退廃態度であることか！ ユウダチは呟く。「き、昨日食べ過ぎたボンシヤブが、今頃効いてきたっばい？」

ボンシヤブ。それは疲労を超回復し、ニューロンをキラキラにする鍋料理の名称であ

る。ポンシヤブの由来は、シヤブシヤブ風に茹でた魚介や野菜を、ポン酢でいただくことによる。ポンシヤブは完全合法料理であり、実際健康悪影響は一切無い。

ポンシヤブ鍋の真正面に陣取るのは、ヨコスカ・チンジフ唯一のカイニ練度駆逐艦としての特権である。ぐらぐらと煮立つ紫色の鍋を、小皿に取り分けては喰らい、取り分けては喰らう。そうして、ユウダチは記憶が飛ぶまで鍋を貪り、至上の幸福感にニユーロンを浸すのであった。

「マスタⅡアシガラのチヨークを止めた人なんて、見たことないよ?」「ぐ、偶然であり、ワザマエではありません」「フブキⅡチャン。実習したことないなんてウソでしょ?」

マイツルの秘蔵っ子だったじゃないの?」「あ、アエエ……」困惑のフブキを挟み、ムツキとキサラギの質問十字砲火。談笑的態度の三人が、イポン杉を背にしたオオヨドの前に居並んだ。

ふと気づけば、駆逐三人はユウダチにアイサツも済ませていない! 日頃の駆逐共の自分への畏敬の念はいずこへ? もしや自分は、カイニ練度無意味的状况に投げ込まれたのか? ユウダチは戦慄した。「はいはい。皆さん、緊張感が足りなさすぎですよ。時間前集合のユウダチⅡサンを見習ってください」ユウダチの自尊心は深海底から急速浮上した! 「オオヨドⅡサンの言うとおりのっぽい!」

オオヨドはアンダーリムを爪先でなぞると、マキモノを広げた。「はい。ここに手引

書があります。どうせ読みませんよね？ 貴方達」「おう。よくわかってんじやねーか」
テンリユウは悪びれる素振りもない！ 「では口頭説明で。一度しか言いませんよ」「わ
わっ。メモしないと」フブキはスカートのポケットに手を入れた。

制服のスカートのポケットがある。おかしいと思いませんか。あなた。

実際、標準的マストラフの殆どは、この真実を知らずにアノヨへと逝く。なんと。セー
ラー服のスカートには、ポケットが装備されているのだ！ これは国家機密であり、そ
の漏洩はセブク案件である。図らずしてこの真実に触れてしまった読者諸氏は、シャカ
リキを決めていただきたい。

フブキがポケットからメモ帳とちびた鉛筆を取り出す。それを見てムツキが笑う。
「輸送任務にメモとか要らないよ？ フブキちゃん」「アエエ？」フブキの頭上に疑問
符が浮かび、ヤジロべめいて揺れている。それでも、その手は律儀にメモを取っている。
オオヨドは一連のやりとりに構わず、事務的に通告する。「旗艦テンリユウ。軽巡は
空缶満載。駆逐は用具一式を所持の上、餌用イ級を1匹曳航。南南東100海里地点ま
で到達後、漁労開始。ハラショー島で物資引渡しの後、半舷休息。帰還時には各艦水煮
缶満載のこと」任務説明の文句はトンボじみて風に乗り、秋空に消えていった。
ムツキは、リスめいた目でフブキの綴るメモを見ている。「任務内容、メモしてどうす
るの？ 誰かに見られたら軍機漏洩だよ？」「アエエ……。しかし、任務失敗はケジメ案

件の事ですね？」サラリマンめいた言葉遣いは、困惑したときのフブキの癖だ。ムツキとフブキは、相互に理解不能アトモスフィアを漂わせている。

その時、珍事が起こった！ テンリュウと自分の二人だけの世界に生きているがごとき、リリー（百合）的態度を常とするタツタが、他人の会話に割って入ったのだ！ 「構わないわ？ 自分のやり方で、どうぞ」「アツハイ。アリガトゴザマス」フブキが声の主を見ると、吸い込まれそうな茜色の瞳と目が合った。フブキは慌てて目を逸らした。

「えー。続けてよろしいですか？ 要するにいつものアレです。用具を持って出港さえしていただければ、半分寝ていても目的地には着くでしょう。あとはヨシナでヨロシク重点です」オオヨドは早口で言い捨て、マキモノを高く放るとチンジフ正門へ踵を返した。「イヨツシャー！」テンリュウは前方回転ジャンプでマキモノをキャッチ、体操選手めいた着地を完璧に決めた！ ワザマエ！

「漁労……。水煮缶満載重点……。」メモを読み返すフブキを見て、キサラギがはたと手を打った。「あつ。もしかして……。フブキさんは、遠征任務のことを、ご存知ないのではありませんでしょうか？」キサラギは、栗色の長い髪を指先に絡めながら、遠慮がちに聞いた。「……アツ。ハイ……」フブキは、消え入るようなか細い返事をした。イポン杉前の一同に、ざわめきが走る！

如月は目を見開いて急接近。フブキの手をとって指を絡ませる！ リリー！「ああ

ブツダ！ やつぱり、実戦専門の特殊カンムス部隊にご所属だったのですね！ フブキ
「チャン！」 堰を切ったように、インタビュウの嵐がフブキを襲う！ 「ブツダエンジン
ル……。駆逐のくせに実戦オンリーかよ！ お前、どんだけエリートなんだよ」「あら、
さぞかし夜もスゴいのかしら？」「あ、ありえないっほい……」

「ア、アノ。エツト、ソノ……」インタビュウの嵐に翻弄されつつ、フブキはコケシめい
て固まっていた。見かねたムツキが声をかけてくれた。「えつと、フブキチャン？
遠征任務は、ギソウの半自動航行機能を使えば、座標も時間もどうにでもなるんだ」「う、
ウン……」フブキは、キサラギに指を絡まれたまま、首だけ横を向いて答えた。

ムツキは小動物的に首を縦に振りながら続けた。「うん。でも、実戦はそうもいかな
いもんね……。やつぱりスゴいね。フブキチャン。うん」ムツキのリスめいた瞳が輝く
！「あつ!? そんなに優秀なら、もしかして南方の最前線にいたの？ だったらスゴイ
級！ もはやヤバイ級だよ！ フブキチャン！」ムツキは夢想的ソッケイを募らせ、
ブツダのごとくフブキを拝み始めた！ ナムサン！

フブキは、己が一瞬にしてキンカク・テンブルの高みに祭り上げられてしまったこと
に戦慄し、失禁寸前だった！ なぜなら、フブキは実戦はおろか、遠征任務に「すら」出
たことがなかったのだ。当然、ギソウの自動航行機能など知る由もないフブキが、任務
の説明を聞いて律儀にメモを取ったのも、無理からぬことであった！

「じ、自分は一駆逐として、本分を果さんと奮励克己して参りましたが、如何とも戦局厳しく、力及ばぬ所大であり……」焦るフブキは、サラリマン的言明癖のままに舌を駆動し、意味不明語彙を羅列するばかりであった。それを聞き、タツタは口元に黒手袋を添えて艶めいた笑みを浮かべる。「いやねえ。堅苦しいわ。もしかして、マイツル・チンジフはみんなこうなの？ ねえ？」

タツタが軽く身を振る。悪趣味になる手前まで胸部を繰り抜いた上着から白いブラウスが突出し、豊満強調的艦影が秋の陽に浮き立つ。そしてなんと、タツタがフブキに流し目を送っている！ テンリュウの立場は？ もしや、突発的トライアングル・リリー状況なのか？ ヨロコンデ！

「まあまあ。いくら優秀なフブキチャンも、そんなにいっぺんにお話されたら、固まっていますわよね？」キサラギは、ようやくリリーの絡めた指を解放した。「アツハイ……エト、お話は後で、ユツクリ」キサラギからの助け舟に、フブキは思う。駆逐艦ムツキ・タイプは、タム口する如來かと！ しかし、フブキは忘れていた。そもそも、このインタビュの嵐を呼んだ張本人がキサラギであることを。これはコトワザに言う「消防局謹製の時限爆弾」だ！

「ヨツシャコラー！ 嫁入り支度の時間だ、お嬢様共。フブキ様の武勇伝は、波の上で聞くとしようや！」旗艦テンリュウの号令が下り、一同は遠征の支度に取り掛かった。フ

ブキは作業の最中、マグロめいた目で必死に弁明の台詞を考えていた。しかし、そのペケロツパ並の頭では、どんな理屈もひねり出せそうになかった。

◆◆15◆◆

任務開始のその瞬間、全ての欺瞞は露呈した！

なぜなら、フブキは自力では直進航行すらおぼつかなかったからである！ ブザマ！

——そして、二時間後。ヨコスカ・チンジフ南2海里。フブキは目を泣き腫らしつつ、心中で末期のハイクを詠んでいた。

(改になりたくない／海の底の貝になりたい)

もし、両腕をムツキとキサラギに支えられていなければ、フブキは今この瞬間にも12.7cm連装砲でセブクするであろう。まさに、父親に上下揃いの下着を買い与えられ、目の前で着替えさせられるレベルの恥ずかしさであった。

「まさか、基本の航行もできないなんて……。アツ。悪口じゃないよ。うん」ムツキは白い手で口を押さえる。「本当にカムムスなのかしら……。あつ。ゴメンナサイ。フブキ「チャン」キサラギはグツバイハンズ。フブキは補助輪自転車めいてフラつきながら左右を支えられ、辛うじて微速前進を続けている。

「餌運びが私の担当なのは納得できないけど、あの米泥棒が恥をかいてるのは爽快っぱい！」ユウダチは、駆逐三人の後方で毒づいている。腰に巻いたロープの先には、口中

にアンカーを撃ち込まれた哀れなシカイ・セイカン・イ級が一匹牽引されている。ドウグ社製のアンカーロープは強靱そのもので、重量数トンに達するイ級の曳航にすら耐える。タクミ！

「全艦原速に増速！ 落伍する奴は水平線に置き去りだ！」ボボンボボンボ。混焼缶から太い排煙をたなびかせ、単縦陣の先頭を行くのは旗艦テンリユウ。外洋航行の基本速度である原速を指示した本人は、どう控えめに見ても一段上の強速まで加速していた。

必定、テンリユウは後続艦に大きく水を開けていく。それを見てユウダチは呟く。「まったく、テンキョーっほい」「そうかしら？」サプライズ！ 振り向けばタツタがいた。「ねえ？ いま、テンリユウⅡチャンになんて言ったのかしら？」ユウダチの喉元に突きつけられたのはタツタ・グレイヴ。カラテが刃物の形をなした、オリジナル・ジツだ！

タツタの狂執的テンリユウ・リリーな態度は、無論ユウダチも知るところである！ 一撃必殺のオリジナル・ジツを突きつけられ、ユウダチは心中で末期のハイクを詠む。（表門のタイガー、裏門のタク）——これではハイクではなくコトワザだ！ しかし、物理的カイシヤクの時は訪れない。

息がかかるほどの近くで、タツタが囁く。「秘書艦ナガトⅡサンが言ってたわ。『シラツユ・タイプは、風呂も静かに入れんのか』……って。うふふ」「アバーツ！」ムザン！

精神的カイシヤクの刃が、ユウダチの中樞ニューロンを両断した！「砂抜き」と称した風呂場での新人ケジメが、秘書艦ナガトにバレていたのである！ナカヨシ重点のチンジフにおいて、リンチは言語道断のセブク案件である。

ユウダチは震える舌を必死に駆動する！「間違いです！忘年会の一発芸に備えて、タライにサーベルを刺して脱出する練習をしていたら、不器用な新人が勘違いして大騒ぎになったつぽ——グワーツ！」ユウダチの氣道をグレイヴの柄が激しく圧迫する！

「んー。斬新な命乞いね。永く苦しみたいのかしら？」頸動脈の圧迫と異なり、氣道の圧迫は永く苦しむが、容易には氣絶へと至らない！クルシイ！

「アバツ。アババ——アエツ？」ユウダチがアノヨへ旅立つ寸前、タツタが拷問の手を止めた。困ったわ、とでも言いたげに眉をひそめて言う。「あら。コレじやまるでリンチね。リンチなんかしたらセブク案件になってしまいわ。許してくれるかしら？ユウダチ「チャン」欺瞞！しかしユウダチは間髪入れず絶叫！「ハイヨロコンデー！」

水平線にまで届かんばかりのユウダチの絶叫！驚いた前方の駆逐三人が振り返ると、タツタが保母めいた笑みで手を振っていた。「はーい。みんな注目！ユウダチ「チャン」が、今日から駆逐のみんなにチャンで呼んでほしいって。わかった？」タツタは右手を振りながら、左手一本でユウダチの首根っこをグラップル。猫めいて軽々と釣り上げる。「ユウダチ「チャン」も。わかった？」ユウダチは間髪入れず絶叫！「ハイヨロ

コンデー！」

ナカヨシ重点の象徴たる「チャン」の呼称で呼び合うことは、ユウジヨウとビョウドウを意味する！ 「ユウダチⅡサン……じゃなかった。ユウダチⅡチャンって呼んでいいの？」フブキは戸惑っている。ムツキやキサラギ、その他の駆逐艦が、怯えを露わに「ユウダチⅡサン」と呼ぶ光景を見ていたからだ。

「いいも悪いも……。軽巡様に言われちゃったら、駆逐は従うしかないよ。うん」「そうですね。上級艦種命令遵守は重点だから、仕方ないわよね」ムツキとキサラギは揃って腕組みし、シシオドシめいた頷きを繰り返した。己を納得させようとしたその動作が、悲劇を招く！ ザツボンガ！ 両腕の支えを失ったフブキが、海中に没した！

ムツキが叫ぶ！ 「ユウダチⅡチャン！ ロープ！ 早く！」ユウダチも事情を察して駆けつけようとする。「でも、腰のイ級が重いっぽ——アエエ？」背中が突如羽毛フートンめいた軽量感となり、ユウダチは前につんのめる。「預かっておくわ。お友達のピッチよ。行ってらっしゃい」なんと、タツタのグレイヴがイ級を槍玉にあげている！ 紫血を幾筋も白肌に滴らせながら微笑むタツタ。サイコパスめいてコワイ！

フブキは轟沈じみた速度で深く海中に没していく。ユウダチはフブキの沈没地点に向かつて全速前進、マサカリめいた勢いでアンカーロープを投錨する！ 「あのときは意地でも浮いてきたのに、なんで今度は素直に水没してるっぽい！ フブキ——フブキ

チャン！」ユウダチが、フブキをチャンで呼んだ！

アンカーロープに手応えあり！ ユウダチは直ちに引き揚げにかかろうとするが、フブキはトロール網のごとくに海中を漂うばかり。そこで、ユウダチはUNIXめいた思考の冴えをみせた！ 「井戸端メソッド！ ムツキが滑車、キサラギは一緒に牽引つばい！」 「ヨロコンデー！」 突然の惨事にヒョロクめいて立ち尽くしていた二人だが、ネジを巻かれたかのように動き出した。

井戸端メソッドとは、高度なベクトル変換である。ムツキが滑車めいた支点となることで斜めの水中ベクトルを直上へ変換し、フブキを効率的に引き揚げようというのだ！ ムツキもキサラギもこの意図を察し、見事な連携によりフブキは浮上を始める。お、コトワザの「如来も三人合体なら阿修羅」とは、まさにこのことか！

イ級片手に駆逐達の連携を見守るタツタ。その後方で、テンリユウが肩をすくめて言う。「まったく。最初っからそうしろつてのに」「あら？ お先してたんじやなかったの？ テンリユウチャン」「フツ。お前らが遅すぎるから、地球一周しちまつたぜ」

テンリユウは海上でアグラ・メデイーション姿勢となりながら愚痴る。これは上級カラテである！ 「ユウダチもよお。力があつて頭もキレんだからよ。相手を馬鹿にさえしなけれりゃ、ソんケイなんて勝手に付いてくるもんだろが。それをあの増上慢は……」 テンリユウは海賊じみた眼帯を引っ張り、ポリポリと顔を掻いた。

「いいじゃない」タツタはテンリユウに青いハンケチを差し出す。「伸びるだけ伸ばして、サクツと刈る。そういう方針でしょう？　ヨコスカは」「まーな？」ハンケチの奥でテンリユウの目が光る。ダテギワク？　「それにあのグラブ、テンリユウちゃんのマ Netto らしいわよ。可愛いじゃない」「んだよそりや」タツタは悪戯めいた笑みを浮かべる。そして、遠くに歓声！

「トツタデー！」ユウダチが叫ぶ！　水柱とともに釣り上げられたフブキは、カツオ・イボン釣り漁めいて宙を舞い、甲板代わりにムツキの華奢な胸板に激突！　「グワーツ！」「ア、アイエ……」フブキが呻いた！　「痛いよ、痛いよフブキちゃん」だが、ムツキは笑顔であつた！　ムツキを押し倒しているフブキの背に、白い腕が重なる。「でも、あつたかいよ。フブキちゃん」秋の日はリリーの雰囲気で暮れゆく。

「アババーツ！」ムツキの胸板で瞬時の安眠を得ていたフブキが、寝耳に水の体で飛び起きた。給食スプーンの先が割れていてもおかしい年頃の駆逐達は、遠慮なく笑う。ユウダチなどは、シツレイにも涙を浮かべながらフブキを指さしている。

「殺す気つばい！　私を笑い殺す気つばい！」ユウダチは、爆笑のあまり過呼吸めいて息も絶え絶えだ。「その間抜け面とか、主機停止なのに浮いてるところとか、もう最高つばい？　ブツダクライストーツ！」過剰シツレイなユウダチをどう諫めようかと思案していたムツキとキサラギも、異常に気づいた！　フブキの主機が停止しているのである！

賢明なる読者諸氏には常識だろうが、主機と書いてモトキと読む。カムムスの海上機動、その全ては動力源の主機あらばこそ可能なのだ。主機が止まったギソウは単なる鉄の塊である。もし海上で主機が停止すれば、ヤクザにコンクリケジメされて港に沈むドシロートのように、二度と浮上することはできない！

フブキの背負う主機は吸気も排気もしておらず、一切の駆動音を立てていない。ギソウが動作している限り、たとえ停泊中でもカムムスの喫水面からは絶えず波が立っている。しかし今、フブキはアメンボめいた無波無音で海面に棒立ちである！これはカラテのワザマエなのか？ はたまたブツダのキマグレなのか？ 「あ、あはは……。バレちゃった？」フブキは、乾いた笑い声をあげながら頭を掻いた。

◆◆16◆◆

しめやかに艦隊行動が再開された。沈没騒動による任務進捗の遅れを取り戻すべく、粛々と14ノットの強速航行が続く。旗艦テンリュウを陣頭、タツタを殿《しんがり》、間に駆逐四艦を横並びとした、変則の輪形陣である。フブキは駆逐の左端で——走っている。そう。波立つ海上を、マラソンめいて走っているのだ！

「昔からできたんだ」フブキは語る。腰からイ級を牽引し、古典的鍛錬じみた姿で走りながら。右から駆逐達の当惑と好奇の視線を感じるが、目を合わせることはない。「私、物心がつく前から、水の上を歩けたんだって。オカアサンが言ってた」フブキはうつむい

たまま、訥々と語る。

「四歳か五歳だったかな。近くの川で歩いてたら、飛んできたオカアサンに怒られたの。『人前で水に入っちゃダメ！ゼツタイ！』……って」主機に頼らぬ自力走行。14ノットで走りながらも、フブキの息に乱れはない。ヒキヤクめいた持久カラテは驚嘆の域である！

「ずっとプールのない学校にいたから、問題はなかったんだ」「でも、友達と土手にイナゴ取りに行ったら、友達が川に落ちちゃって。どんどん流されて。気がついたら川を走ってた」「あとは……その日のうちにマイツルに喚び出されて、色々」フブキは言葉を濁した。駆逐達も何も聞けなかった。

日はとつぷりと暮れ、上弦の月が巻雲を照らす。五つの主機と一つの足音が、協奏曲となつて波間を漂う。「色々、あつたんだよね」ムツキがフブキの右手を優しく握った。

「アウエイキン・ウルフ・ライゼス・ザ・オータム・スト ム・ヨコスカ」後編

◆◆17◆◆

ここはチンジフの裏波止場。間もなく日付が変わる。黒く染まった風景に、群青色の人影が浮かんで見えた。背中にかかる長い髪。黒いタイトスカート。女は、海を見ながら紫煙を燻らせていた。休みなく雲を焦がす対シカイ・サーチライトに背を向けながら。「オツタンカ」カワチ・ダイアローグを聞いて、女は振り向いた。

女はアシガラ。ゴウコンに依らずカナムスソウルに目覚めし稀有な存在、リアルカナムスだ。「チョークを。止められたわ」アシガラは、吸いさしの煙草を指で弾いた。煙草はカタパルトめいた射出速度で海へ飛翔。圧縮されて極小の花火となり、銃声的破裂音を立てて闇夜に消える。ワザマエ！

「そら、ゴツツイナー」チンジフ唯一のカワチ・ダイアローグを使うのは、無論テイトクである。奇異なのは言葉だけではない。海軍帽に桜の徽章。目下を覆う鈍色「提」「督」メンポ。ボロ布めいた有り様の白詰襟だが、背中だけが真新しい。そこに黒く刺繍されしは無数のミンチヨ文字。まさに異装である！

対シカイ・サーチライトの照り返しで、白詰襟の背の文字が読み取れる。「蒼龍」「名取」「千代田」これは、如何なる意味か？

——賢明な読者諸氏は、すでにお気づきであろう。カンムスに宿るとされる108のイクサ船の魂、その真名が刺繍されているのだ。テイトクの……背中に！

背中の刺繍をさらに見れば、所々に白い虫食いがある。「加賀」の隣。「那智」「羽黒」の間。

——そう、このマッポーの世にカンムスソウルが召喚されしとき、白詰襟の背からその真名が消えるのだ。十数年前のある冬、「吹雪」の真名もその背から消えた。そして今、ヨコスカにいる。

「勿体ナイ吸い方しよつて」テイトクは懐から煙草を差し出す。箱から一本突き出した煙草を、アシガラは唇で受け取る！顔を突き出す一連の動きで、下から舐めるようにテイトクの顔を見上げた。「提」「督」メンポの奥に、隠しきれぬ古傷が見えた。「ドーモ」アシガラはぞんざいに礼を言い、背を向けた。

シボボツ。ヘドギアのアンテナからアーク放電が迸る。人外の手段で煙草に着火すると、アシガラは右足を係留ビットに乗せた。マドロスめいた大胆姿勢により、タイトスカートからタイツへと、黒くしなやかな脚線美が流れていく。「アシガラさん。サソートルの？」「膝が痛いだよ」夜風が古傷に響いた。

「アントキの。エライスマンかった」「今更？　お互い様よ」「サヨカ」会話は途絶え、紫煙だけが秋の夜空に吸われていく。

アシガラのチョークを止めたフブキは、現在ヨコスカ・チンジフ南南東38海里を肅々と航行中である。

(あのこも)　アシガラは、啞え煙草で咳いた。

◆◆18◆◆

午前二時から原速。遠征艦隊は作戦行動の遅れを取り戻していた。暁の水平線が白み始め、旗艦テンリュウが目を細める。

「ツシャオラー！　小休止だけお嬢様共！」

「えっと。そろそろかな？」ムツキは膝に手をつけて休む。「徹夜のお散歩は飽きるっばーい！」対して、ユウダチは波を枕に仰向け姿勢。自室のフートン上めいた所作を海上でこなしている。二人の姿勢の差は、すなわちカラテの差である！

「あら。結局お一人で牽引させてしまいましたね。お疲れかしら？　フブキちゃん」キサラギはちやつかりと持ち込んでいた浮き輪を膨らませ、そこに座している。弱者の知恵であった。「いえ。何も持たないで走ると、軽すぎてバランスを崩しちゃうんです。ちようど良かったです」

2トンを超えるイ級を徹夜で牽引しながらも、フブキに疲労の色は実際ない。「す、凄

いわねえ……」キサラギは、手榴のついでに冷や汗を拭った。

「でも、なんで動かないのかな？ 主機」フブキは右足一本でフラミンゴめいた立ち姿となり、左の靴を外して逆さにする。

おお、新体操めいた海上バランススカラテ！ もしフブキが空母であったならば、海上片足立ちにて弓を射ったという、古代海上空手の型「カガ・ゼロスタイル」すら実現可能ではあるまいか！

左右の靴、両手の砲と、フブキはギソウの各部を外しては振り、外しては振って水抜きのような動作をした。その後、いよいよ背中の主機全体を逆さに振ろうと逆立ちの構えをした——が、流石にスカートで逆立ちは如何なものか、思い返し断念した。ムネン！

「あ、ありえない格好っぽい……」ユウダチはフブキのカラテに圧倒され、無意識に正座していた。ドゲザしろと言われれば、しめやかに従ってしまいそうなほどに、恐怖に近い感情がニューロンを満たしていた。

「あの。フブキちゃん……。ギソウは、水抜きとかそういうので直ったりしないよ？」ムツキは、リスめいた瞳を泳がせながらも、辛うじて笑顔を作って忠告した。

「ハラシヨール島なら、ドックもあるわ。なんとかかなるでしょう」柔らかく声をかけながら近づいてきたのは、軽巡タツタ。くつろいでいた駆逐達は大慌てで横一列に並び、敬礼

をする。「あら？　休止中はダラけてなさいな。それより、島へのおみやげを用意しないとね」

タツタはグレイヴを取り出すと、バトンめいて軽々と振り回す。湿った夜明けの風が、白刃に切られてウミネコめいた鳴き声をあげた。「おみやげ……って、何？」「ああ。ここで釣りをするんだよ。フブキⅡチャン」ムツキに言われて、フブキは持参した装備一式を思い出す。

バイオシユロ荒縄。フラフープめいた巨大フック。半殺しのイ級一匹。そして任務説明にあつた「漁労」の言葉——まさか！

ユウダチが碧眼を見開いて言う。「イ級の友釣り！　雑用艦のムツキ・タイプが、いつもやらされてる退屈任務っばい！」

「そう。だからみんな、仲良くね？」タツタの持つ白刃が、朝日を反射してユウダチの目を射る！　「アエエ……。楽しいパーティーにしましょう。みなさん」直立不動となるユウダチ。ニューロンには昨晚の気道圧迫ケジメの悪夢がよぎっていた。

「ツツシャオラー！　狩りの時間だぜヒヤツハー！」テンリユウが叫ぶ。夜明けの海に血の香り！

ゼンネンレイの読者諸氏に御覽いただくため、一部の描写を抽象的にすることを御容赦いただきたい。イ級の友釣り。これはシカイ・セイカン・イ級の持つ、強い仲間意識

を逆用した漁である。まず、イ級の断末魔を四海に轟かせ、仲間を救出せんと馳せ参じるイ級を次々と半殺しにして荒縄に繋ぐ。

そして、イ級をヌタウナギ養殖場まで曳航の後、海中に沈めてヌタウナギの餌とする。一月後に荒縄を引き上げる。すると、喰い残されたイ級の皮を網代わりとして、肉を食い尽くして繁殖しきったヌタウナギが、やすやすと穫れる。甚だ簡略的な説明で恐縮だが、これが、ヨコスカ・チンジフの主たる収入源、イ級の友釣りである！

◆◆19◆◆

「こんな……こんなやつてないよ！」フブキは青ざめて立ち尽くす。その周囲を駆けずり回る駆逐達から声が飛ぶ！ ユウダチ！「いいから、とっととフック刺すっぽい！」キサラギ！「あら。ロープが足りなくなるのではないかしら？」ムツキ！「フブキ！チャーン、動いて！」

輪形陣の中央には生贄のイ級。イ級はアンカーを打たれ動けないまま、体中をナマスに切られて悲鳴と紫血を垂れ流している。「イグワーツ！」痛みへのうち傷口が開く！ さらに出血！「イグワーツ！」痛みへのうち傷口が開く！ さらに出血！ サツバツ！

輪形陣の外周を軽巡が回る。テンリユウとタツタは、それぞれのエモノであるカタナ・ソードとグレイヴを操り、イ級の脊髄を無慈悲に刺し壊す。哀れなイ級は波間に漂

うツキジ・マグロとなり、勤勉な駆逐達に荒縄フック連結されるのを待つばかりである。「ツシャオラー！」「今日は大漁ねー」テンリユウ・タイプは快調にイ級の脊髓をケジメしていく。チンジフから約100海里。この海域はイ級の巢に近く、格好の漁場だ。「漲つてきたぜ！ 食らえ、伝説の突き——ツ！」テンリユウは35匹目の脊髓を刺し壊しながら、狂った決め台詞を吐いた。

イ級の習性を利用した、残酷非道極まる単純労働が始まってから小一時間。「さて、そろそろいいんじゃない？」タツタが21匹目を刺し壊した、その時である！

「……ンジャコラー？ スツゾコラー！」ヤクザ・スラングを吐きながらも、テンリユウは冷汗を流している！ 彼女は朝日が照らす東の海を凝視する。海が、黒い。黒が七分に海が三分！ 「ナマツコラー！」とめどない冷汗！

黒い水平線はやがて黒蟻めいて粒立ち、その中から一匹が高く跳ね、着水して水柱を上げた。

ゴウランガ！ 水平線を埋め尽くす、シカイ駆逐の大群だ！ 群れをなすのはイ級ばかりではない。ロ級・ハ級を交えたトリプルアソートが、急速に迫りつつある！ ナムアミダブツ！

「テンリユウⅡチャン。漲つてきた？」グレイヴを正眼に構え直すタツタ。いつものヨウ・アティテュードを保っているが、その顔に笑みはない。「コトワザにもあるぜ。

『32の作戦の内、逃げるシカを追わないのが最善です』ってな！」テンリユウは黄の信号弾を撃った！ 撤退戦用意！

「アエエ……？ 黄色!? 逃げるの？ ナンデ？」信号煙を見たムツキがコケシめいて固まる。「イクサ場で考える奴は死ぬっばい！ 道具捨てて！ 機関全速、用意！」ユウダチの的確な絶叫指示！ ムツキはフツクを、キサラギは荒縄を手放し、機関を焚きつける。微速から全速までの所要時間、約1分！

なぜ1分もかかるのか？ ——賢明な読者諸氏はお思いかも知れない。現に、フブキが海没したあの瞬間、ユウダチは全速力で駆け出したではないかと。しかし、思い出していただきたい。あのととき、ユウダチはタツタの気道圧迫拷問から逃れようとすでに全力を出していた。故に、機関は十二分に温まっていた。なればこそ、即座に全速力を出すことができたのだ。

「ブツダ！ こんな実弾の大盤振る舞い、主計科に大目玉だぜ！」B D O O M!! B D O O M!! テンリユウとタツタは、14cm単装砲を乱射している。駆逐共にシカイ駆逐が向かわぬよう、せめてもの陽動をしているのだ！ 「いいじゃない。実包消費なんて三年ぶりよ！ 反動！ 硝煙！ アーイイ。遙かにいいわ！」タツタが鼻腔一杯に硝煙を吸い込むと、青白い顔に赤みが差した。

テンリユウもタツタも、この三年間、一発たりとて主砲弾を撃っていなかった。それ

もそのはず、ギソウの一部として刀剣を帯びる彼女等は、弾薬を消費せぬカラテを生き残りの術として磨いてきた。イ級を屠っては運び、屠っては運ぶという、単調残酷往復任務は、二人のカラテ個性を存分に発揮する場であった。

読者諸氏には思い返していただきたい。ダイホンエ・ヘドクオーターのキアイ・ドクトリンを。

「物資は有限であるが、カラテは無限である」カラムスの最大長所はその戦闘力にあらず。無限のカラテで無限の銃砲弾と無限の魚雷、無限の艦載機を生成する、無限の経済性にある！

しかし！ テンリユウ・タイプは砲弾一発すらカラテで作り出せない。彼女等は砲雷撃に実包を消費せざるをえないのだ。砲弾一発が人一匹の命より貴重な国情を鑑みれば、彼女等は戦闘艦としては出来損ないの極みである。だがそれでも、その特異な経済カラテによつて、ヨコスカ・チンジフは彼女等を重用しているのであった。

テンリユウが信号弾を撃つてから、一分経過！

「んー？ そろそろ、みんな暖まったかしら？」タツタが水を向けた。「ツシャオラー！ 全艦全速南進！ ハラショー島方面へ突つ切れ！ 荷物はシカイにくれてやれ！」電信せずとも届く、テンリユウの絶叫号令！ 即座に五艦は転舵南進。タツタは、スゴイ級ハッカーめいた高速タイピングで、チンジフにモールス信号を送る。

◆◆20◆◆

！
 転舵南進したのは五艦。そう、ただ一艦が取り残されているのだ。それは——フブキ

「アバーツ！ 絡まった。絡まっています。待つてくださいアバーツ！」フブキの足に絡むのは、駆逐達の作業の賜物。すなわち、半殺イ級フック連結荒縄数珠繋ぎだ！ ハラシヨー島への手土産となるべきおぞましき工芸品が、致命的トラップとなつてフブキに絡みついている！ ナムサン！

シカイ駆逐イ級・ロ級・ハ級。無慈悲なトリプルアソートが東から迫る！ それに呼応するかのごとく、半殺イ級フック連結荒縄数珠繋ぎフブキ添えが動き出した！ 脊髄を刺し壊されてもなお消えぬ帰巢本能が、仲間の群れへと奔りだす！ 当然フブキもドナドナめいて強制曳航される！ ナムアミダブツ！

「フブキ！ チャンが、いない！」ムツキはふとフブキの落伍に気づき、減速し——減速させない！ 「全速、全速南進だ！ それ以外考えるなお嬢様！」「グワーツ！」「テンリユウがムツキの右腕を捻じり上げているのだ！」「でも、でもフブキ！ チャンちゃんグワーツ！」「大丈夫」タツタが無表情にムツキの左肩を極めた。

フルネルソンめいた三体合体がやや船足を落とす間に、キサラギとユウダチが前に出る格好となつた。「あら？ そういえばフブキ！ チャンが——」「——いないっばい？」

テンリュウの絶叫号令を聞いた瞬間から、脇目もふらず走ってきた二人。彼女等に、フビキを案ずる余裕などはあろうはずもない。

キサラギは一瞬青ざめた顔を左右に振り、オカメめいた欺瞞笑顔を形成した。「タツタⅡサンが、大丈夫って言ったもの。大丈夫よね？」ユウダチは犬耳ライク・アホゲをはためかせ、即答！「大丈夫っほい！」二人は余計なニューロンが働かぬよう、努めて真っ直ぐに、ひたすら真っ直ぐに全速南進を継続した。

「フツダー！ フブキⅡチャンが！ ジーザス！ フブキⅡチャン！ オーディン！ ナマハゲ！」ムツキは半狂乱となり、神仏の名を唱えながらテンリュウ・タイプ二艦の拘束を振りほどこうとする！ 「聞き分ける！」SMAASH!! 「グワーツ！」テンリュウが、ムツキの柔らかな頬を、平手でしたたかに打った！ いわゆるバリキ注入である！

SMAASH!! 「グワーツ！」SMAASH!! 「グワーツ！」SMAASH!! 「グワーツ！」無慈悲な往復バリキ注入だ！ ムツキの頬はリスめいて赤く腫れ上がる！ 「アエツ……。アエツ……。ハイ、ワカリマシタ……。ムツキは激しく前後されたキムスメのように虚ろな目となり、ようやく抵抗を諦めた。読者諸氏にお話するのも心苦しい、テンリュウのこの暴虐的説得術！ はたして彼女は鬼めいて非情なのか？ 否！ テンリュウが非情なのではない。戦場が非情なのだ！

ムツキは両脇からテンリユウ・タイプに抱えられたまま、南進を再開する。むせび泣くムツキの涙を、黒手袋が拭った。「大丈夫よ。あの子が……」タツタは北へ飛ぶウミネコを見送った。その先にはフブキがいるはず。「あの子が——リアルカムスなら」

◆◆21◆◆

同時刻、ヨコスカ・チンジフ電探室。

宿直から解放され、今しも朝風呂に突撃せんとしていたオオヨドの専用UNIX端末に、巨大な赤色ミンチヨ文字が強調表示された！

「シカ・シカ・シカ」

——我方隊ハ撤退戦ニ突入セリ——

「入電！ 遠征艦隊、シカイ駆逐無数と遭遇?! これはナマハゲですか！ 場所……ハラシヨー島北、20海里? ——テイトクに報告を！」

「シー? ゴツツイ状況ヤネ」アンブツシュ! 背後からの声は、オオヨドが提督室直通のIRC回線を開くより早かった。見れば、肘掛け椅子には既に誰かが座っている。海軍帽に鈍色の「提」「督」メンポ。その下から響く、カワチ・ダイアローグ。テイトクその人である！

「タツタから続電! 『フブキ落伍、シカイ駆逐二鹵獲サル』宿直明けのオオヨドの顔は、隈をますます深めていく。しかし、テイトクに動じる様子は微塵もない。緑の目を

鈍く光らせながら、シンシテキにオオヨドが飲み残したチヤを啜っている。鈍色メンポはクワガタめいて左右に開閉し、飲食を可能とする機構を備えていた。タクミ!

「マ、轟沈とはユートラヘンのヤロ?」「はい。ですが!」「タツタは全速で戦域を離脱中なのです。状況確認などできるわけが!」「……ああブツダ。どうしてこんな」合掌姿勢でUNIX画面を注視するオオヨドは、テイトクのシンシテキ行為に気づく余裕などありはしなかった。

オオヨドは合掌を解き、アンダーリムのツルをしきりに撫でる。「続電……続電はないの?」

KNOCK!! 一瞬の静寂をノックが破った。「オハヨウゴザイマス……おや? 引継ぎの時間ではないのか? オオヨド」秘書艦ナガトのエントリーだ! ナガトは毎日朝四時に起床し、チンジフ各施設を視察する。それは、秘書艦としての業務ではなく、彼女の自発的行為であった。

「オハヨウゴザイマス。秘書艦ナガトIIサン。緊急入電が!」——見せろ!」叫びながらUNIX端末に駆け寄るナガト。何かを跳ね飛ばしたが、気にしなかった。ギソウを纏わずとも、彼女の恵まれた体軀から繰り出す体当たりは実際危険だ。それでも彼女は気にしなかった。

「シカイ駆逐、無数だと……?」ナガトは一瞬沈黙し、思考を巡らす。「ハラショー島の

電探に感は？ 定時の偵察機から報告は？」「ありません！ 湧いて出たとしか言いようがないですよ」CHATA!! TATA!! オオヨドはすでに半泣きとなり、画面を更新する「能五」ボタンを連打している。「おおブツダ。私はなにか罪を犯しましたか？

オーボン・フェスタのドネーションが足りなかつたのですか？」

「朝からソーゾーしいで。オオヨド〓サン。あと、朝からエエ腹筋ヤネ。ナガト〓サン」ナガトが、未必の故意で殺人タツクルを仕掛けた相手は、すなわちテイトクは、無傷であつた！

「アグツ……」ナガトの腹筋に、蛇に舐められたような悪寒が走る！ テイトクは激突の刹那、迫り来る衝撃をカラテでいなしながら、ナガトの割れた腹筋を指先で愛でる余裕さえあつたのだ！ おお、何たるシンシテキワザマエであることか！

「テイトク。アカギを叩き起して艦攻を出させます。宜しいですね？」ナガトはテイトクの

シンシテキ行為を賞賛する時間も惜しみ、裁可を求める。しかしテイトクは答えず、オオヨドの飲み残しの最後の一滴を、名残り惜しそうに啜つた。「テイトク！」ナガトは怒声と共にギソウを纏う。狭い電探室で41cm・ツヨイ・カノンの展開は危険だ！

落下音！ 案の定、電探室のモニタが一枚割れた。

「落ちて着キーヤ、ナガト〓サン。艦攻ヤテ？ 着く前チューカ、出す前に終わるヤロ。一

緒にチャでも飲モーヤ」ここに至り、ナガトはようやくアリューシヤンの流水めいた冷静さを取り戻した。眼前のテイトクの落ち着きようは、ただのヒョーロクの無思慮ではない。テイトクには、確信がある！

「ならば、まずは座らせていただきます」ナガトはギソウを解除した。41cm・ツヨイ・カノンを急に格納するのも、また危険だ！ 落下音！ 案の定、電探室のモニタが一枚割れた。アカギの緊急呼び出しIRC回線を、開くか開くまいかと躊躇していたオオヨドが、「入る」キーに指を乗せたまま聞く。「アノ？ 私は？」

「チャでも淹れんカイ。オオヨド〓サン。熱いンを二つ頼むデ」テイトクは空のマグユノミを戦議機

の端に置く。「アツハイ！」オオヨドは給湯室へ走る。テイトクが占有しているマグユノミが、自分のものであることなど意識になかった。

電探室には、ナガトとテイトクが残された。「昔話になるケドな」「何でしょう」「アシガラを一番多く殴ったんは、誰ヤ？」テイトクは、電探室で唯一の肘掛け椅子に、深く座り直した。「私です」ナガトは即答し、スツールに座る。ナガトの席は戦議機を挟んでテイトクの真向かいだが、その視線はUNIX端末に注がれていた。

「ナガト〓サン。まあ、ヨーケ殴ったナー？ 素手。教導棒。弱装三式弾を腹にカマしたり。セヤナ？」「全て、必要な教導でした」UNIX端末は、「待機な」の緑ミンチヨ

文字を出したまま固まっている。「シヨミーのところ、ドナイやった?」「怖かったんちゃう? ホンマは?」

テイトクは、マグユノミの取手を爪弾いた。ぐるりと一回転して止まるかに見えたマグユノミが、二回転、三回転とするうちに回転軸をずらしながら加速し、ナガトへ向かって机上进行だす! 違法改造ベীগオマめいたマグユノミの駆動力は、無論テイトクのカラテに由来する!

ナガトは、右手を驚めいた形に開いて受け止めようとする——も、失敗! CRASS SH!! 哀れなオオヨド愛用マグユノミは、コトワザに言う「自殺志願者の頭を冷やすにはトーフ」の通りに四散し、赤い取っ手だけが指輪めいてナガトの薬指に収まった。カッコカリ!

「肯定。自分が恐怖を感じたカンムスは、アレだけです」「ドナイな恐怖?」「喰われる……適切な表現とは思いませんが。第一感で、喰われそうな……と」「アタリヤロ」提督の目が緑色に明滅した。

ヨコスカ・チンジフ黎明期。所属カンムスがまだ十指に満たぬ時代から、戦艦ナガトは秘書艦としてカンムス達を褒め、叱り、殴ってきた。近年は前線に立つ機会も減ったとはいえ、重巡クラス以上のシカイ・セイカンとの実戦経験も数多い。百戦錬磨の戦艦ナガトが恐怖を感じたカンムスが、重巡洋艦アシガラただ一人とは!

しばしの間、ゼンめいた抽象論をお許し頂きたい。

恐怖の本質とは何だろうか。

鼠は猫を恐れるが、象を恐れない。象はたやすく鼠を踏み潰すが、決して獲物として狙いはしないからだ。

人は狼を恐れるが、牛を恐れない。時に猛牛はたやすく人を突き殺すが、決して人を喰らいはしないからだ。

喰われる恐怖。それは生物としての絶対恐怖であり、学習や経験では決して克服できない宿命的感情である。

——ならば、シカイ・セイカンは？ その生態が未だ不明とはいえ、彼等も一種の生物であるならば、何かを恐れることはあるのだろうか？

「今頃、ビビっとるんチャウン？」テイトクがUNIX端末を見やる。海軍帽とメンポの間から、鋭い緑色眼光が差している。「どちらが……ですか？」ナガトの薬指から赤い取手が落ち、床にあたって乾いた音を立てた。テイトクの首が、糸の切れたジヨルリのように前にガクリと垂れた。

「アカン……。アカンて。今のズツコケ、ナガトⅡサンのケジメ案件なのでは？ ゴツツ決まっとったワイの台詞を、なんで聞き返すんや？ 察し悪イでモー。カンニンしてや」テイトクは、うつむいたまま戦議机に愚痴を垂れ流す。「ハツ……」ナガトは床の

取っ手を舵めいたハイヒールで踏み潰し、理不尽に耐えた。

◆◆◆

給湯室から戻ったオオヨドは、電探室の扉を小さく空けた。中の様子を伺うと、アンダーリムの眼鏡越しに、戦議机に散乱する赤い破片が見えた。今ここに至ってオオヨドは気づく。あれは愛用のマグユノミの成れの果てだ！ しかし、今はコトワザに言う「オーボンの前のマイクロボン」だ。オオヨドは平静を装いつつ言った「オチャが入りました」

「オツソイで」「入れ」肘掛け椅子にもたれるテイトク。スツールに座るナガト。その間には散乱するマグユノミの破片。一体、如何なる痴情のもつれ、否、激論の衝突がありや!? オオヨドは訝しみながら恐る恐るユノミを配る。淹れたのは士官用の高級ゲートキーパー・チャダ。電探室に甘い香りが漂う。

「ホー。マイヅル名物」テイトクは早速一口啜った。「そうなのですか?」ナガトは茶柱を凝視している。「知らんノ? イクサ馬鹿ヤネー」「恥ずかしながら……」チャノミ・トークが成立している。ならば、二人の対立は解消されたのだ。小心者のオオヨドは、それ以上考えるのをやめた。

「アー?」テイトクが白手袋でUNIX端末を指差す。「な、なんででしょう!」オオヨドはチャのオカワリかと思ひ、急須を手にとった。「入電とチャウ?」見れば、UNIX

端末に着信あり！ オオヨドは定位置の椅子へと走る。黒画面を、極太の水色ゴシック文字が走り抜ける。

——シロタヘノフフキノコロモサムカラシムネノホムラヲナヒクオホカミ——

「電文解説……不能！ シカイ・セイカンによるハックでしょうか——アエーツ!?」オオヨドはテイトクに振り向いたつもりが、刹那にして目の前に窓が迫った！ 不可解状況！

「ア？ チョロいやロ。貸しタリーヤ」入れ替わりにUNIX端末の前に座るは、テイトク！

刹那にして、テイトクの座る肘掛け椅子と、オオヨドの座るスツールが入れ替わっていったのだ！ これぞ暗黒カラテ秘技、チャブ・シフトである！

テイトクはスゴイ級ハッカー的速度でIME「お得」を操作した。CLATTTTTTE!! 機関砲めいた打鍵の後、しめやかに「空な」キーが押下された。表示された解析結果は——ハイクであった！

白妙の 吹雪の衣 寒からし

胸の焔を 靡く狼

「ハイク、ハイクだというのか！」「五節ハイク！ ブツダエンジェル！」ナガトとオオヨドは顔面蒼白である。何故？ たかがハイクが、どれほどの驚愕に値するというのか

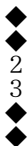
?

賢明な読者諸氏には常識であろうが、老婆心からの解説をお許し願う。ハイクの起源は、平安時代のオンミヨ・ソーサレス、アベベ・ヒミコの呪文である。一節読めば今日の四聖獣占いのランクが一つ上がり、二節読めば夜尿症が完治、三節読めばしめやかに失禁するという、禁断のコトダマ。それがハイクである！

ならば、五節のハイクを詠めば、天変地異を引き起こすとも言えるのか？ 「マ、最初のハイクやし。コンナンチャウ？」しかし、テイトクは朝刊の折り込み健康食品アド・オリガミでも見るかのように、平然とUNIXモニタを眺めている。

「ハイクを詠んだだと……まさか」ナガトの腹筋が震えている。「たかが駆逐が、ハイクを詠んだと？ アバーツ！」オオヨドは全身を痙攣させ、失神寸前だ！

「記録ヤ」テイトクは、低く冷たい声を電探室に響かせた。「今の電文傍受時刻」「アツハイ！」正気を取り戻したオオヨドはUNIX端末に駆け寄り、IRCログを確認する。「コーコク歴2078年9月27日、午前6時17分！」「覚えトキヤ」テイトクはそれだけを言い残し、電探室を後にした。



半殺イ級フック連結荒縄数珠繋ぎの添え物、つまりフブキは荒縄に足を曳かれ、最大戦速で死地へと牽引されている。だが、不思議とフブキに恐怖はなかった。仰向けに浮

かぶフブキはシエスタめいて目を閉じ、波間に揺れる木の葉のように、ただ襲い来る荒波をいなすばかりであった。

フブキの足先から脳天へと、無数の波が流れていく。目を閉じたままで五体に感じる波の蠕動。それは無性に暖かかった。フブキは思う。もし、自分に母の胎内の記憶があつたなら、こういうものかもしれないと。そしてさらに思う。この中枢ニューロンを石炭めいて赤熱させる感情は——何なのかと。

彼女の短い人生は、その感情を形容すべき言葉を教えてくれなかった。しかし、少なくとも恐怖ではなかった。それだけは明確に理解できた。

(敵……周りは全て、敵。敵を。敵なら)

ニューロンの底から、懐かしい声が聞こえた。昨日の水没騒動以来、完全に停止していた主機が、低く唸った。

水平線を埋め尽くすほどのシカイ駆逐は、いつしか大円陣を敷いていた。その直径、約二キロ。五千、いや六千のシカイ駆逐が敷く大円陣。ブラックホールめいたその渦に吸い込まれる十数匹。半殺イ級フック連結荒縄数珠繋ぎフブキ添えだ。呼応して、マントラ一つで海を割ったというブツダの奇跡めいて円陣が割れる。大円陣の中央に、フブキが曳き据えられた。

那由多の金属蟬が、盛夏に鳴いたごとくの、轟音！ 数万基の5inch単装砲が、一

斉にフブキを照準した。死槍が擦れ合う金属音が、雲を震わす大音声となる。たとえ歴戦の猛者でも、末期のハイクすら詠めぬほどのドツタン場である。

しかし、それは、吠えた！

グーググググググウオオオオン。人間も動力機関も発し得ない、獣の咆哮。フブキの口は閉じていた。主機は再び沈黙していた。しかし、六千のシカイ駆逐には、その吠え声は確かに聞こえていたのだ。この声は何処から？

◆◆24◆◆

半殺イ級フック連結荒縄数珠繋ぎに強制曳航され始めてから、今この時まで。固く閉じられていたフブキの目が、開いた。朝の秋空は天高く、フブキの瞳を雲が流れる。雲は白く、冷たく、疾く流れ、いつしか吹雪となつて吹き荒れる。

——白妙の——

誰かがハイクを詠んでいる。フブキは遠くで聞いていた。

——吹雪の衣 寒からし——

懐かしい声は、誰か。母。母でない。友。友でもない。

——胸の焔を 靡く狼——

そうか。いつも聞こえていた、あの声か。

そして、フブキは、吹雪となった。

六千のシカイ駆逐を前にして、吹雪は無造作に立ち上がった。その右目はセンコめいて細まっていた。その左目は闇夜の猫めいて見開き、瞳は紅に曳光していた。バイオシユロ荒縄が絡んだままの手足は、摩擦に皮膚を千切られ流血している。

偶然に、極めて偶然に、吹雪とイ級の目が合った。「ドーモ……」その声は、フブキより十歳も大人びていた。吹雪は、握手でも求めるかのように右手を伸ばした。荒縄の噛み跡から滲みだす血が潮風を吸い込み、血煙となつて右手を覆う。次の瞬間、その手には特型駆逐艦吹雪の主砲、12.7cm連装砲が握られていた。

吹雪はギソウを纏い、主砲を……否！ その非常識スケールは、駆逐の主砲ではない！ 吹雪の右腕よりあからさまに長いその砲身長は、戦艦主砲にすら相当する逸物であつた！ しかし、吹雪は自らその逸物を定義した。「これは、12.7cm連装砲。撃てば弾が出るただのテッポウ」言いながら、吹雪がイ級を見据える眼光はますます厳しさを増していく。

「撃つよ」GYA O O O N E!! 12.7cm連装砲の一斉射！ 砲声とはもはや呼べぬ、獣めいた二重咆哮！

——しかし、撃たれたのはイ級ではない！ 半殺イ級フック連結荒縄数珠繋ぎと吹雪を繋ぐ、バイオシユロ荒縄だ！ 係累を断ち切り、吹雪は背を丸めて両手を低く垂らす。オスモウ仕切りめいた、あるいは肉食獣めいた構えとなつた。

「ねえ？ 撃ったよ？」フブキは海面スレスレから砲塔をしゃくり、未だ硝煙を燻らす砲口を舐めた。S I Z Z Z L I N G!! 舌が焦げ、イオウのごとき蒸気を上げる！ しかしなんと、吹雪の顔はノメーンめいた無感情！ そう、これが純粹戦闘存在、リアルカナムスである！

「ねえ。撃たないの？」フブキがイ級に左手をかぎす。再び血煙が規格外の連装砲を形成し、正面のイ級を照準する。「ピ、ピグワーツ！」イ級は怯えとも威嚇ともつかぬ奇声を発した。

「そうだよね。撃てないよね」GYA O O O N E!! 12.7cm連装砲が、イ級の眉間を撃ち抜く！「イアバーツ！」無慈悲な砲弾が口級体内の弾薬袋を貫通！ 誘爆により爆発四散せしめた！ ナムアミダブツ！

戦端は開かれた！ そして、六千のシカイ駆逐から、吹雪目掛けてインガオホーの反撃が……反撃はない!? フブキを十重二十重に囲むシカイ駆逐は、一匹たりとも5inch砲を放とうとはしない。これは如何なる不可思議状況か？

「囲んで。脅して。泣いて謝るとでも」右連装砲！ GYA O O O N E!! 「数を頼みのスケロク共が」左連装砲！ GYA O O O N E!! 「ほらほら！ ヒョーロクめいてないで、何か言えつてんだよ、クジラ野郎！」再び右連装砲！ GYA O O O N E!!

読者諸氏は耳を、いや目を疑っておられるだろうか？ 吹雪が砲声と交互に発する、

ヤクザスラングめいた恫喝口調を見よ！　しばしばサラリマン的ですからある礼節重点な吹雪の口調とは、あまりにも異質ではないか！

吹雪の無慈悲な連撃で、既に5匹のシカイ駆逐が爆発四散した。それでもなお、六千のシカイ駆逐に反撃の兆しなし！　黒紙の中央に火が付いたかのごとく、包囲の輪がジリジリと押し広げられている。一万二千の5inch砲が前後に磨れ合い、錆びた唸りが悲鳴じみて海原に轟く。

「撃てないよな！　分かってる！」右連装砲！　GYA O O O N E!!　無慈悲に続く吹雪の砲撃！　「包囲の際は火線が互いを避けるように布陣せよ」これは、安土桃山時代の天才軍師にして吟遊詩人であった、シヨカツ・チョーメイの至言である。

THAT IS!!　畢竟つまるところ、シカイ駆逐は吹雪を囲みすぎた。あまりにも布陣密度を高めすぎた。故に、吹雪への砲撃はその背後に位置する味方への砲撃と同義であった。同族意識が強く仲間が傷つくのを何よりも嫌うシカイ・セイカン。吹雪はカラムス洞察力でその本能を見抜き、逆用したのだ！

「まだ撃てない？　なら、これで！」吹雪は、自ら切断したばかりのバイオシユロ荒縄を鷲掴みにし、主機を滾らせる。HOW L L L L Y!!　遠吠えめいた吸気は重油とカムスソウルを混焼し、血煙じみた排気が吹雪の顔を覆いつつ形を変える。マフラーめいた布、そして、メンポに！

吹雪は、如何なる超自然的原理で形成されたとも知れぬその桜色の薄布を、吹き流しめいて靡かせている。メンポとマフラーめいた布。このシンピテキ佇まいはもしま、古来よりブツダの教えを守りし神話的戦士では？ 純粹戦闘存在リアル・カンムスとは、まさかニンジ——否！ 断じて否！ 読者諸氏にも否定と忘却を懇願する。吹雪はカンムス。カンムスである！

「Was shoi!!」禍々しくも猛々しき咆哮と共に剛力を発し、吹雪は半殺イ級フック連結荒縄数珠繋ぎを天空へ放る。それはアドバルーンめいて中空に縦一文字となり、垂直落下！ 真下で吹雪が——顎《あぎと》を開いた！ 両手に纏う12.7cm連装砲、2基4門を牙として！

「喰らうー」2基4門の連装砲がイ級の頭部を咬み、刹那に発砲！ GYAOOONE!!
 イ級は爆発四散！「喰らえー」咬み、発砲！ GYAOOONE!! イ級は爆発四散！
 「喰つてやるー」咬み、発砲！ GYAOOONE!! イ級は爆発四散！ GYAOOONE!!
 GYAOOONE!! 吹雪は紫血に塗れ、ジゴクめいた咀嚼でイ級を貪食していく！

KABOOM!! とうとう、恐怖に負けた5inch砲が火を噴いた！ それは、シカイ駆逐の破壊を告げる、マップー審判の法螺貝に他ならない。十重二十重に吹雪を囲んでいたシカイ駆逐が、闇雲に円陣中央を砲撃する。KABOOM!!「ログワーツ！」K

ABOOM!!「ハグワーツ！」 必定、フレンドリー・ファイア多発！ ナムアミダブツ！

アビ・インフェルノとはまさにこのことだ。絶対的捕食者が執拗に刷り込んだ喰われる恐怖により、シカイ駆逐は恐慌に追い込まれた。フレンドリー・ファイアの業火は止まず、シカイ駆逐の大円陣は、破滅の炎と断末魔の叫びを上げながら、狂乱の渦となつて燃え尽きようとしている。その只中で、吹雪は？ 吹雪はいかに！

◆◆25◆◆

おお、ゴウランガ！ 狂気の砲渦が己を呑み込まんとする寸前、吹雪は海神に挑むかの如き裂帛の気合と共に、海面を殴打した！「イヤーツ！」すると、足元から巨大なヤリめいた水柱が屹立し、吹雪は瞬時に遙か上空へと誘われた。これぞ古代水中カラテ「ミズゲイボルグ」である！

恐怖に目を曇らせたシカイ駆逐共には、瞬時に砲渦の遙か上空へ逃れた吹雪の所在を知る由もない！ 無慈悲な、ひたすら無慈悲なフレンドリー・ファイアの業火に自ら焼かれ、ムザンに爆発四散するのみである！ KABOOM!!「イヤーツ！」KABOOM!!「ロアバーツ！」KABOOM!!「ハアバーツ！」おお、インガオホー！

六千のシカイ駆逐による、ジゴクめいた包围陣であった。それが今、吹雪一人が扇動した恐慌により壊滅寸前に追い込まれている！ KABOOM!! KABOOM!!

禁忌のフレンドリー・ファイアにより、イ級の屍が、ロ級の骸が、ハ級の肉塊が、円陣中央へと砲圧で吹き寄せられる。それらは、マッポー絵師も自主規制するほどの死の屑山を形成した！

血煙が織りなした桜色のマフラーを靡かせ、水柱から死の山に降り立つ吹雪。ブツダエンジェルの降臨としてウキヨエに描かれるほどのシンピテキ光景だが、シカイ駆逐にとつては恐怖の大王の降臨そのものである！

「イヤーツ！」吹雪はカラテ・シャウトと共に、12.7cm連装砲2基4門を咬合した！ クロス・カタナめいて交叉する連装砲。それは絶対的な死の暗示であり、人類とシカイ・セイカンの種族差を容易に超越する恐怖の形象であった！

「アグワーツ!!!」

わずか数分前まで六千の大円陣を敷いていたシカイ駆逐も、今や生存数は役千五百！その全艦が、畏れに哭いた！

「消えろ！」GYA O O O N E!! 交叉したままの連装砲が空に吠える！それを号砲代わりに、黒色花火の炸裂めいて、シカイ駆逐は四方八方に逃走を開始した。「そっち！」GYA O O O N E!! 吹雪は北に発砲！「違う！」GYA O O O N E!! 西に発砲！「そっじゃない！」GYA O O O N E!! 南に発砲！

GYA O O O N E!! 吹雪は死の山から海面を砲撃している。これは決して乱射で

はない。シカイ駆逐の当走路を東に限定しているのだ。羊飼いの牧童めいて、吹雪単艦が千五百を超えるシカイ駆逐の手綱を握っている！　これぞ、人類がシカイ・セイカンに新たな恐怖を抱かせた歴史的瞬間であった！

狂乱の渦を逃れたシカイ駆逐は役千五百。東へ。ひたすら東へ。狼の牙に追い立てられ、先を争って敗走していく。焼けた砲を、落とした魚雷を、削げた肉片を点々と残しながら。

GYA O O O N E!! 「帰れ！　クジラ共！」紫血に染まった逃走路に向けて、吹雪は連装砲を撃ち続けた。

「帰れ！　帰れ！」カラテは尽きた。既に撃つ弾は無かった。「帰って！　帰って。お願い……」

その顔に桜色のメンポはない。先刻まで冷酷な殺意を宿していた瞳は、焦点を失い震えている。シカイ駆逐のニューロンを凍らす恫喝を吐いていた唇も、紫に震えている。

——吹雪は、フブキに返つたのだ。

フブキは南の水平線を見た。ハラショー島までは20海里か、あるいは30海里か。シカイ駆逐はもう来ないだろうか。「これで、みんな……」安堵と消耗が、フブキの灼けたニューロンを冷やしていく。シカイ駆逐の焦げた死骸をフートンとして、フブキは深く眠りに落ちていった。

◆◆26◆◆

ボンスは衆愚に説く。「ブツダは最も高い場所から我らを見守っています」と。

ならば。シカイ駆逐の砲渦を見下し、古代海上カラテ「ミズゲイボルグ」の水柱上に悠然と佇む吹雪の、さらに上空でカメラを構える彼女は、如何なる存在であろうか？

二式大艇。全幅38m、全長28mの大型飛行艇だ。上空三千メートルを飛ぶその翼上で、彼女は平然と立って二眼レフのシャッターを切る。「見ちゃいました！」SHOT!! 「見ちゃいました！」SHOT!! 嬌声が四発エンジンに負けじと響く。合いの手はシャッター音だ。

135ノットの対気速度をもともせず、翼上で撮影をするその姿。セーラー服に黄色のネクタイ。少年めいたハーフパンツ。だが見よ！ そのピンクのうなじを！ おお、オーバーニーソックスとハーフパンツに垣間見る、太腿の眩しさを！ 間違いない。彼女もまた、カンムスである！

「よく見えますねえ」SHOT!! そしてメモ！ このカンムスは、上空から吹雪の驚異的戦闘の一部始終を記録していたのだ。高度三千で左旋回を続ける、二式大艇の翼上で！ ゴウランガ！ 恐るべきカラテである。

《燃料限界な。帰還重点》操縦士からIRC通信が入る。「構いませんよ？ なんなら、私は歩いてでも帰れますすし」カンムスはカメラのレンズにカバーをかけ、青い瞳で水柱

から降り立つ吹雪を見ている。「狂犬カワイイ……」矛盾的賞賛だが、欺瞞は無い!

《アイエエエ! 帰還指示、ヨシナニ!》サンシタじみた哀願通信が繰り返される。カラムスは応じず、吹雪がシカイ駆逐を追い立て、力尽きるまでの動静を見守っていた。

《帰還指示、ヨシナニ!》「あー。目標が寝ちやいましたね……」《帰還指示、ヨシナニ!》「ま。深入りしすぎないのが長生きのコツですからね?」「今日は帰りましょう。昼食はお好み焼きでと伝えてください」《ヨロコンデー!》二式大艇は旋回を止め、西に航路を取った。

◆◆27◆◆

ハラシヨー島を目前とした浅海域。テンリユウ旗艦の遠征艦隊五艦は足を止め、フブキの動静を探っている。「偵察機があればな……。あつても、俺達には使えないけどよ」テンリユウが歯噛みする。「もう、落ち着いたかしら?」タツタは、ムツキの肩から手を離した。

ムツキは取り残されたフブキを思う。こみ上げる涙を零すまいと、空を見上げた。北東から微かに爆音が聞こえる。「四発……? サセボの大艇かしら」キサラギにも聞こえたようだ。「金持ちクレーが、一機買ったって話も聞いたっばい」ユウダチも空を見上げ、爆音の主を探している。

「入電!」タツタが右耳を抑えた。

《ゴリラ、センベイ、オタカラ》

——北カラ、目標接近、待機セヨ——

「どういうこと？」タツタは訝しんだが、続電はない。巧妙に雲に隠れていた二式大艇は僅かに機影を覗かせ、すぐまた身を隠した。爆音は西へと去っていった。

「アツ北、北です。アエエエ！」ユウダチが北を指差し固まっている。一同が北の水平線を見ると、黒い塊が見えた！

北から黒紫の煙を上げて近づくと、氷山めいた巨塊！シカイ駆逐の追手なのか？ユウダチは海上にキムスメ座りとなつて失禁寸前であつた。

「フブキ……フブキチャンネル！」突然、ムツキが北に走りだした！とうとう、忍耐の限界を超えた恐怖でリアリティ・ショックを発症したのか？よもや、そのマーベラスルーセントな40デニールの下は失禁はしていないのか？

否、ムツキは正気を保っていた！失禁もしていなかった！読者諸氏も心して頂きたい。本当の希望は、血も凍るような絶望の底から芽吹くことを。決してテイトク指定の40デニールストッキングの下からではないということをし！

ムツキのリスめいた瞳に映る、煙管型の吸気管。無論、フブキである！「おお、ブツダは起きていやがった！」PANG!! テンリュウが左掌を右拳で豪快に打つ。「ヨコスカから入電。『僚艦ヲ回収、ハラショー島へ』……ですつて」タツタは黒手袋を脱ぐと

テンリユウに手を振る。PANG!! テンリユウの豪快なハイタッチが決まった。

硝煙漂うシカイ駆逐の遺骸さえ、困憊したフブキには柔らかなフートンであった。未だまどろみに落ちているフブキを、何かが柔らかく揺り起こした。潮に流されていた遺骸が、浅瀬に差し掛かり減速したのだ。それだけではない。遠くで誰かが呼んでいる。
「フブキ……フブキ……オタツシャデー！」

その声でフブキは目覚めた。しかし、手はもう上がらない。足はもう立てない。せめてもの返事をしようと、フブキは呟く。「オタツシャだよ……」目を開けると、遺骸に背を持たれたフブキの前方に、手を振りながらかけてくる……ムツキ!

「フブキ……チャン! フブキ……チャン!」ムツキの涙声! 「オタツシャっほーい!」ユウダチ! 「あら。よくオタツシャで……」キサラギ! 「どうやってエンマを騙して来やがった、このお嬢様!」テンリユウ! 「うふふ。お赤飯炊かないと」タツタ!

——皆の声が、聞こえた!



カンムスレイヤー第一部「アウエイキン・ウルフ・イン・オータム・ストーム・ヨコスカ」終わり